



# お堀談義報告書



基調講演 菊池先生



調査報告



グループ談義結果の発表



グループ談義

令和3年11月28日

あめんぼセンターAVホール

## 水の会

柳川市市民協働のまちづくり事業

## もくじ

|                               | ページ |
|-------------------------------|-----|
| ◇ 主催者あいさつ . . . . .           | 1   |
| ◇ 開催趣旨 . . . . .              | 2   |
| ◇ 基調講演 「掘割の仕組みと役割の変遷」 . . .   | 3   |
| 九州大学名誉教授 菊地成朋 氏               |     |
| ◇ 調査報告                        |     |
| ① 「汚れる前の柳川のお堀と暮らし」 . . . . .  | 17  |
| 九州大学大学院生 石本大歩 氏               |     |
| ② 「昭和20年代の水量の変化の原因」 . . . . . | 22  |
| 水の会 幹事 平野幸二                   |     |
| ◇ グループ談義                      |     |
| Aグループ 「景観」 . . . . .          | 25  |
| Bグループ 「活用」 . . . . .          | 32  |
| Cグループ 「防災」 . . . . .          | 39  |
| Dグループ 「浄化・生物」 . . . . .       | 40  |
| ◇ 講評 . . . . .                | 48  |



## ＜主催者あいさつ＞

水の会会長 立花民雄

お寒い中、お集まりいただきありがとうございました。この事業は柳川市市民協働のまちづくり事業の一環で実施しております。

私共水の会では、この事業の3か年計画で、昨年は市民の方や観光客の方に活用していただきたく、お堀のぶらぶらマップを作成しました。そして、毎年「柳川堀割物語」を上映しています。今年はお堀談義としてシンポジウムを開催し、来年報告書にまとめてお堀づくりの提案活動の指針とさせて頂きたいと考えております。

私たちの子供の頃は、お堀にベンチョコ（ヤリタナゴ）やテナガエビがたくさんいました。そして、田んぼに水を上げるポンプからドジョウがバチバチ上がってきていました。そのドジョウをウナギハエナワの餌にしてウナギを獲っていました。

この堀割は、柳川に人が住み始めてから約2,000年、城下町ができて約500年と、この堀割のお蔭で飲用水や防災など生活や暮らしを支えられてきました。ところが、戦前から上水道の普及、水田の農薬や家庭雑排水の流入などでお堀は排水路と化し、わずか15～20年間ぐらいでゴミ捨て場になりました。その15～20年間に汚した堀割を取り戻すのに市民の皆さん方が大変苦労してきました。ベンチョコもいません。ドジョウも田んぼに上がってきません。

柳川堀割物語にも出てきます広松伝さんは、河川浄化計画で3つの柱を作って清流を取り戻そうとして運動されました。そして、今でいう市民共同参画で堀割は再生、存続したのが昭和52年の半ば、それから45年くらい経ちます。しかしながらお堀の水は、昔のように一向にきれいになっていかないのが今の堀割の姿です。

数千年のお堀の歴史の中で、わずか15～20年間堀割を汚したために、きれいにするのに、道半ば、50～60年かかってでも再生をしなければなりません。昔みたいにさらさら流れる堀割にしたいと私たちは願っています。

しかし、若い方たちが、さらさら流れている堀割を知らないというのが現実です。今日は、年配の方々にたくさん来ていただいたので、昔の堀割はどうだったのか、どこで泳いでいたのか、どんな遊びをしていたのか、どんな魚を取っていたのか、どういう生活をしていたのか、お話を大変楽しみにしています。

窓から竿を出し、釣れた魚を食べられるような町になったらこんな素晴らしい町はないはずです。今は、魚は臭くて汚くて食べないと言われていますが、おかしい話です。ぜひ、皆さまと一緒に清流を取り戻す運動の一環になるように、そして、どのようにしたらそのような堀割になるのかが、今日のお堀談義のテーマですので、長時間になりますが、よろしくお願いします。



## < 開催趣旨 >

河川浄化計画と市民協働の掃除等によってひと頃の掘割よりずいぶんきれいになりました。

しかし、汚れる前（昭和 20 年代以前）の掘割はもっときれいでもっと流れがあったそうです。柳川にとっての掘割は、血管であり流れる水は血液です。きれいな水が流れる掘割があってこそ住みたい柳川、誇れる柳川になると信じています。

私たちは、目指すべき掘割の姿を共有し、その実現のために何をなすべきかを考えるために、この座談会を行います。

## < プログラム >

1 主催者あいさつ 水の会会長 立花民雄

2 基調講演 「掘割の仕組みと役割の変遷」 講師：九州大学名誉教授 菊地成朋 氏

### < 略歴 >

専門は建築計画学、居住文化論。

東京大学助手、九州大学助教授を経て1998年九州大学教授。2021年より九州大学名誉教授。

主な著書に『韓国現代住居学』、『砺波散居村における居住システムの分析』、『住まいを読むー現代日本住居論』、『図解柳川』、『都市理解のワークショップ』ほか。工学博士。

### < 柳川について >

1999年よりフィールドワークに取り組み、城下町の空間構造、掘割・水路と居住地との関係、干拓地の形成過程などについて調査研究を行ってきた。

### < 柳川市の各種委員会 >

2006～2007年 柳川市文化的景観保存活用計画策定委員会 委員長

2017～2018年 柳川市名勝水郷柳河保存活用計画策定委員会 委員長

## 3 調査報告

① 汚れる前の柳川のお堀と暮らし 九州大学大学院生 石本大歩 氏

② 昭和 20 年代の水量変化の原因 水の会 平野幸二

## 4 グループ談義

参加者を 3～4 グループ（1 グループ約 6 名）に分け、テーマごとにブレインストーミングを行い、グループごとに発表し、アドバイザーからコメントをもらう。そして、掘割の目指すべき姿とともにその道標を明確化する。

### ◇ テーマ

A: 景観 B: 活用（生活・遊び） C: 防災 D: 浄化・生物

### ◇ アドバイザー

① 菊地成朋 氏（九州大学名誉教授）

② 松永久氏（柳川市水路課長）

③ 佐々木秋雄氏（柳川みやま土木組合事務局長）

④ 横山正司氏（柳川郷土研究会理事）

## 基調講演 「掘割の仕組みと役割の変遷」

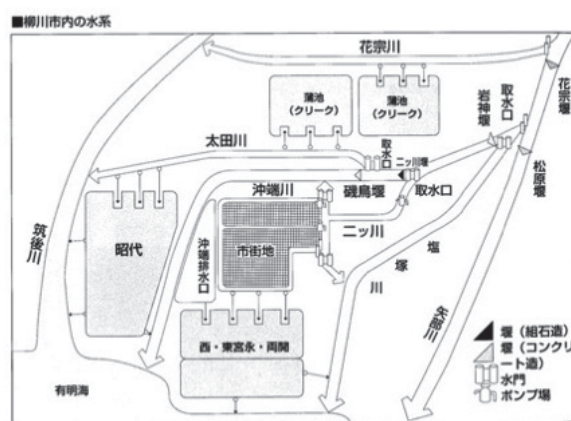
九州大学名誉教授 菊地成朋 氏

ご紹介いただきました菊地です。よろしくお願いします。柳川には1999年に研究で入りまして、それからいろんなところを調べさせてもらいました。さらに、文化庁の文化的景観事業で柳川の掘割が最初のパイロット事業の対象になりましたので、その検討に関わることになったり、あるいは、つい最近ですけれども、水郷柳河が国の名勝に指定されて、その保存計画作成にも関わりました。

これからお話しする内容は柳川にお住まいの方々は知っている話が多いかと思いますが、今日の全体の趣旨は「掘割の未来を考えよう」ということなので、それに向けて情報を共有するという意味でお聞きいただければと思います。ちなみに、柳川にお住まいの方、手を挙げていただけますか。(数秒待たれて) 柳川以外から来られた方は？ 結構いらっしゃいますね。じゃあ、お話しする意味があるかもしれませんね。ありがとうございます。ございます。

講演のタイトルを「柳川の仕組みと掘割の変遷」としました。「変遷」という言葉を入れましたけれども、今日参加されているみなさんは、柳川を変えずに守っていこうと考えておられると思います。でも、都市は常に変化するもので、柳川も例外ではあり

ません。それは避けられない。その中で、本当に守っていくべきものは何かを考えていかなければならないと思います。その参考になればということで、お話しさせていただきます。



『第4次柳川市総合計画』より  
No.1

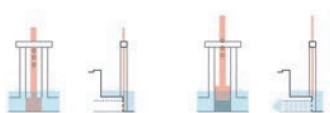
### 1. 地理的特性と水利システム

柳川はもともと湿地帯で、土地の高低差がなく、そこに水路が縦横無尽に通っている。なぜこのような水路網が発達したのかというと、言うまでもなく農業の灌漑用水のためです。これはそのネットワークをモデル的に示したものですが（No. 1）、このように城下町の掘割も灌漑用水の一端を担っていて、今でも農業用水として使われています。水路の最も重要な役割は、農地に水を送ることだったんですね。

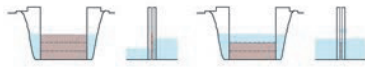
それを高低差のない中で行うということです。最下流域の低平地なので、なかなか難しいわけです。そこで、水を溜めたり流したりするのを上手に調節するというシステムが独自に発達した。その仕組みを「もたせ」

# Variety of MOTASE

HIKAN (樋管)



ENTAI (堰埭)



NAGAREDOSHI (流れ通し)



No.2

と言っています。これはそれらの装置を図にしたものです(No. 2)。上から、樋管(ひかん)、堰埭(えんたい)、流れ通し(ながれどし)。特にこういう形をした流れ通しのことをV字形流れ通しと言っています。樋管は、ここを開け閉めすることによって川の底部の部分の水を流したり止めたりする装置。堰埭は、高さを調節することによって表面の水を流したり止めたりする。V字形流れ通しは、常に開いた状態なわけですが、上の方が幅が広いので、水量が多い時には水を多く流す。それに対して、水量が少ない時は、下が狭くなっていますので、水を堰



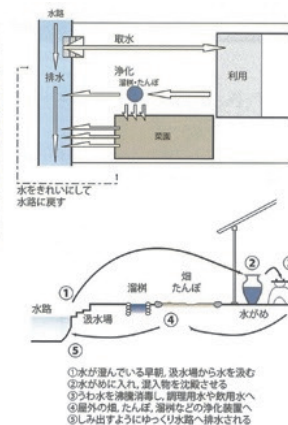
No.3

き止めるという装置です。そういう調整を自動的に行うものなんですね。今でもこれらの「もたせ」の装置を、市内のあちこちで目に見ることができます。

もう少し広域的に見ると、地域に張り巡らされた水路ネットワークにキメ細かく配置されているというのが、柳川の「もたせ」システムですね(No. 3)。このように「もたせ」システムは、小規模な装置の組み合わせでできているところに特徴があります。

まとめると、柳川は有明海沿岸の低平地という地理的特性から、「もたせ」という独自の水利システムが発達したわけです。それによって、先ほど立花会長からお話があったように、地表の水の生活利用というのを行っていて、これが生活と水路の近接性を生んでいたということになります。そういう人々の生活と水路の近接性を素材にした写真がいろんな写真家によって撮られています。

掘割の水は飲料水としても使われていました。左側の写真は、スタジオジブリの『柳



No.4

図32:生活用水の管理システム

菊地研究室『図解柳川』より

川堀割物語』で使われた場所です(No. 4)。水を飲料水として利用するために、使い方のルールがありました。それを表したのが、右側のモデル図です。まず、水を汲むのは水が澄んでいる早朝。それをすぐに使わずに水瓶に溜める。溜めることで、沈殿作用で水をきれいにする。上水だけをとって、沸騰消毒して、飲料水などに使う。それを捨てる際には、直接堀割に捨てるのではなくて、畑田んぼ溜枿などの浄化装置に捨てて、そこで染み出すように浄化された水が、堀割に戻ってという循環システムを各家がやっていたわけです。以上が、水の仕組みについての説明です。

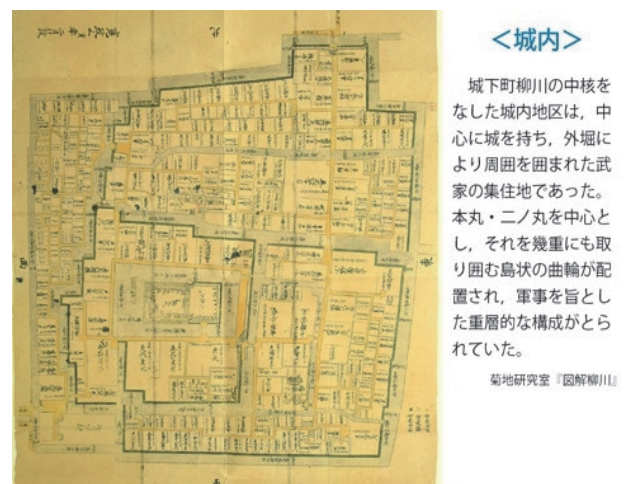
## 2. 城下町柳川の都市構造

どちらかというと、私はこちらの方が専門です。現在の柳川のベースは、江戸初期の田中吉政の時代につくられたとされています。柳川は、戦国期は大友配下の蒲池氏の領地でした。秀吉の九州仕置によって宗茂が入城します。ただ、宗茂が関ヶ原の戦いで西軍についたため改易になり、東軍の武将で関ヶ原の戦いで活躍した田中吉政がその軍功で、岡崎 10 万石から筑後 32 万 5 千石の領主に出世するんですね。岡崎は徳川のお膝元で、当時の日本の中央にありました。その岡崎から移ってきた。その際に、吉政は柳川城を本拠地としたんですね。筑後にはいくつか拠点があったんですけど、そのなか

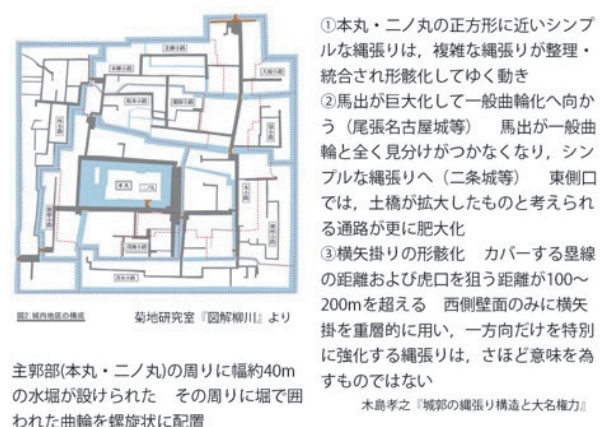
ら柳川城を居城としたんです。

それで城下町の整備を始めるんですが、これが整備というより新都市建設と言っていい、まさに土木大名的な手腕を発揮して都市計画をするんですね。城下町の特徴というのは、まず城という中心があることです。さらに柳川は3つの地域に分かれていて、それぞれで地域構造が明確に違います。「城内」が武家地、「柳河」が町人地、「沖端」が漁村と港と、それぞれ性格が分かれていて、絵図も別々に書かれています。

最初に柳川城のある「城内」を見ていきます(No. 5, 6)。城内は中心に城を持ち、外堀に



No.5



No.6



より周囲を囲まれた武家の集住地です。本丸・二ノ丸の中心部の周りに約40メートルの水堀が設けられている。その周りに、堀で囲まれた曲輪<sup>くるわ</sup>を渦巻き状に配置するという、非常に重層的な構成です。本丸を中心としてはっきりとした求心的構造をしています。

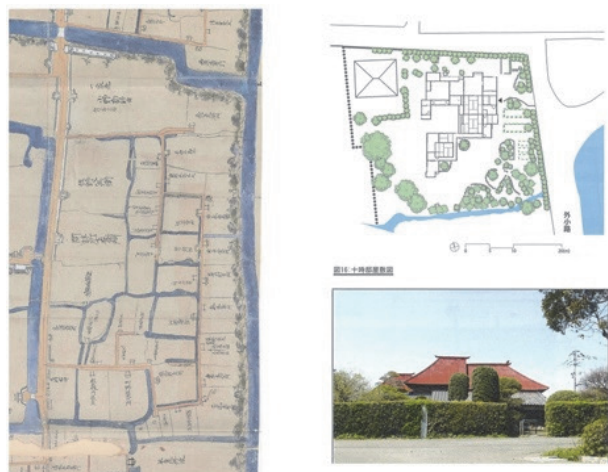
城郭史が専門の木島孝之さんによると、柳川の城郭というのは隣接する佐賀などとはかなり違って、佐賀では本丸が真ん中じゃなく、狭い。家臣団の屋敷が本丸と差がなくて結構大きいんですね。ちなみに佐賀の鍋島氏は地元の豪族からのしあがった大名で、名目上の領主が龍造寺氏で、必ずしも絶対的な権限を掌握していなかったと言われています。権力構造としては、家臣団の連合体として運営されている。それが反映されて、城郭の縄張り構造は求心性が強くない。それに対して柳川は、本丸の中心性が強い構造になっている。ただし、本丸・二ノ丸が正方形に近いシンプルな形で、かなり整理されている。それから、二ノ丸から出て

きたところは馬出で防御装置になるはずなんですが、他の曲輪と同じような武家地になっている。また、西側に横矢掛りという、敵が攻めてきた時に矢を射る仕掛けがあるんですが、これがどうも距離がありすぎて、実用性が伴っていないということのようです。さらに、横矢掛りが西側にしかないということも言われています。

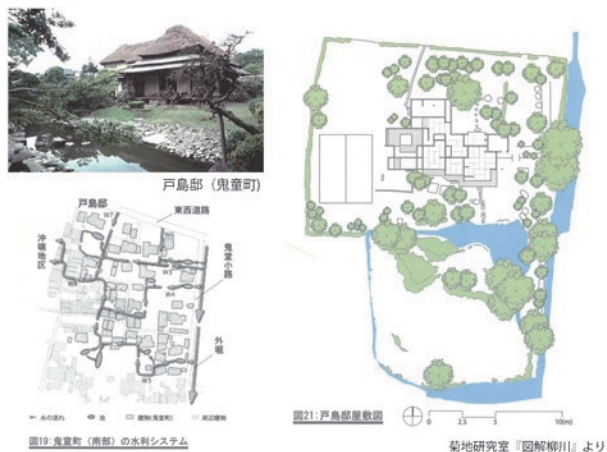
結局のところ、城下町の機能、特に掘割の機能というのは防衛機能にあるわけですが、実質的にはあまり役に立たないものだったと木島さんは言っています。岡崎から来た田中吉政の都市づくりは、この時代の最先端のものだったと考えられます。ただし、城郭本来の防御は、もはやデザイン要素にすぎなくなってきている。

これは例えば鎧兜もそうですね。本当の戦はもうありませんので、装飾品的になってくる。

それぞれの曲輪は、幅の広い堀で囲われているわけなんですが、その曲輪の内部に武家の屋敷地がどのように構成されているのか。左の絵図は奥州小路、今の奥州町です(No. 7)。それぞれの屋敷は独立的にできていて、堀や生垣で囲われていて門があるという構成になっています。ただし、内部に水路で水が引かれているんですね。武士の居住地にはインフラとしての水路が通っていたんです。右に示した新外町の十時邸を



No.7



No.8

見ても、屋敷内に水路で水が引き込まれているのがわかると思います。

こちら (No. 8) は皆さんご存じだと思うんですが、戸島家です。鬼童町にあります。鬼童町は我々が最初に調査させていただいたところなんですが、戸島家には立派な庭があって池がある。この池も、鬼童町の水の流れのネットワークの中に作られていて、それを池に使ったり、汲み場をつくったりと連続して使うようなシステムになっています。戸島家の池もそういうネットワークの一端なんですね。以前は、柳川の旧武家地にはこういう庭に池を持った家が結構あった



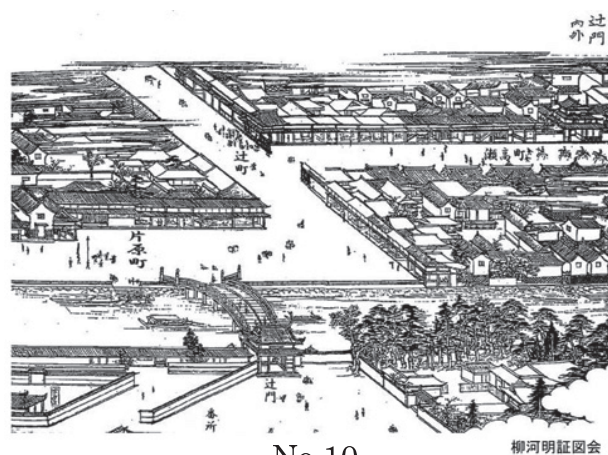
No.9

んですが、今は無くなってきています。

次に町人地の柳河地区です。昔の絵図ではわかりにくいので、我々が書き起こしたものをお見せします (No. 9)。柳川には町小路絵図というものが残っていて、それは各町、小路ごとに町割が略図と文字で描かれたものなんですが、それを正確な地図上に起こしてつなぎ合わせてみたのがこの図です。柳河地区は町人地と言われていますが、実際には町人だけではなくて、武家地や寺社地、このピンクが武家地ですけれども、そういうものが混じっていました。点線で示しているのが街道で、それに沿って町人地が形成されて、その背後に武家地や職人町ってというのが配置されていたわけです。

これは柳河明証図会ですけれども (No. 10)、橋のところが辻門で、その手前側が城内ですね。で、堀の向こう側が柳河で、右が瀬高町 (現在の京町) です。これが町人の通りで、町家の店らしきものが連なっていることがわかるかと思います。

こういうところで、水がどのように利用



No.10

されていたかですが、町人地区では武家地のように各家に水を引き込むのではなく、町家の後ろ側に水路が走っていて、これが今でいう水道のような役割を果たしていたんですね。水路には惣汲水場が付けられて、共同の水汲み場として機能していました。武家地に比べ、町人地っていうのはそうした共同性が強いという特徴がある。今でもそういう水汲み場が残っています。橋のたもととか、神社なんかに見られます。

これは瀬高町、今の京町の水路の様子ですけれども(No. 11)、京町は街道が軸で、その南側に水路が走っています。この水路が幹線水路で、この地区の主要な流れとなっていて、このあと西側に流れて農地にまでつながっています。この水路は取水口近くで分岐して京町の北側にも流れている。それで町の両側に水路が流れている。ところが、汲水場の位置を見ると、南側に集中していて、北側には見られないんです。南側の惣汲水場を日常的に北側の住民も使っていた。



京町の南側水路は柳河地区の幹線水路で、北側水路もそこから分岐したものである。かつての惣汲水場の位置を確認すると、南側水路に集中しており、北側には全く見られない。南側の惣汲水場は北側の住民も日常的に利用していた。

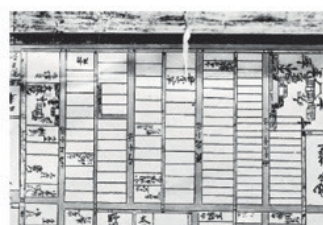
菊地研究室『図解柳河川』より



京町南側水路（昭和初期） 新柳川明証図会より

## No.11

足軽小路（常盤町）



常盤町は、江戸時代には足軽の屋敷地であった。4つの足軽小路の両側に短冊型の敷地が連なり、その間に水路が通されていた。各敷地はそれぞれ小路と水路とに面しており、狭いながらも専用の入口と水利用空間を持った自立的な構成であった。



小路間に設けられた水路は柳河地区の水系の末端に位置している。したがって、これらの水路はもっぱら、足軽の家々に生活用水を供給するために計画されたと考えられる。

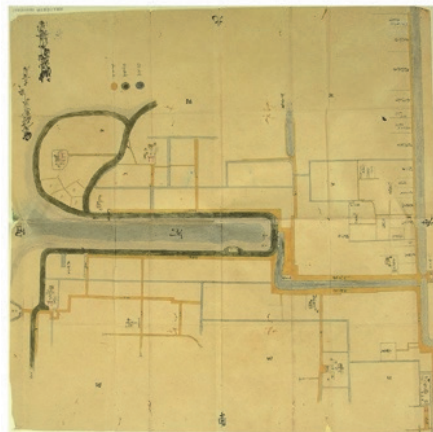
菊地研究室『図解柳河川』

## No.12

町人地においては、共同性というものが強く働いています。

さきほど柳河地区には、町人地だけではなく武家地もあったと言いましたが、常盤町はその一つで、江戸時代には西覚寺小路、鉄砲小路、弓小路、鷹匠小路という4つの足軽小路でした(No. 12)。道と水路が交互に通る、そこに短冊状に敷地割がされているので、各屋敷は道に玄関を持って、裏で水路と接しているという、狭いながらも自立的な武家地の特徴が見られます。この4つの足軽小路は、すぐ北に川があるんですけど、その川から水を引いているわけではなくて、柳河地区の水系の末端に位置するような水路で、この水路はもっぱら足軽の家々に生活用水を供給するために引かれたものだった。足軽小路は、現代で言えば社宅団地のようなものだったということが出来ます。





No.13

**<沖端>**  
 沖端は、かつては有明海沿岸の諸地域や長崎・下関・大阪とも交易する重要な港であり、物資を川府で市街地へと輸送する中継地点としても機能していた。藩政時代には町人・職人・武士・漁師といった多彩な人々が住んでいた。

菊地研究室『図解柳川』



菊地研究室『図解柳川』より

No.14

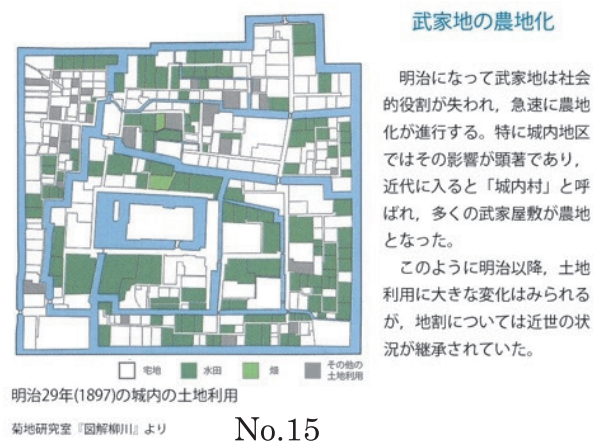
次に3つ目の沖端地区です。沖端には港があって、交通の拠点でした。絵図(No. 13)ではわかりづらいので、現代の地図に落とし直して作ったものをお見せします(No. 14)。沖端は古くは漁村だったと考えられていますけれども、江戸時代には、漁師の他に、町人、職人、武士といった多彩な人々が住んでいたわけです。この図の黄色い部分が町人地です。茶色が漁師町。ピンクの鬼童町は武家地、戸島邸のある所ですね。周囲に、グレーの屋敷群がありますが、これは農村部です。周りは田んぼです。水路については、水天宮のところ、今は川下りの終点になっているところですが、そこに外堀の水が流れてきていて、そこから二丁井樋を通して、港に流れ出ていました。港というのは海に面していて、水の動きが堀とは全然違うんですね。それをつないでいるのが二丁井樋。港は干満の差があって違う動きをします。あともう一つ、この地図を見てわかるのが、かつては港が土居で囲まれていたことです。今とはだいぶ違う風景だった

と思われます。

### 3. 明治以降の柳川と堀割

明治になって城下町ではなくなるんですけども、堀割は維持されました。大正時代になっても、基本的に江戸時代の水路ネットワーク構造を維持しています。役割としても、人々の生活利用、生活インフラとして使われていて、飲用水、生活用水の供給、灌漑、農業用水ですね、それから排水、船による運搬など、様々な役割をもって使われていました。

明治になっての大きな変化の一つは、城下町ではなくなったために、まず城という

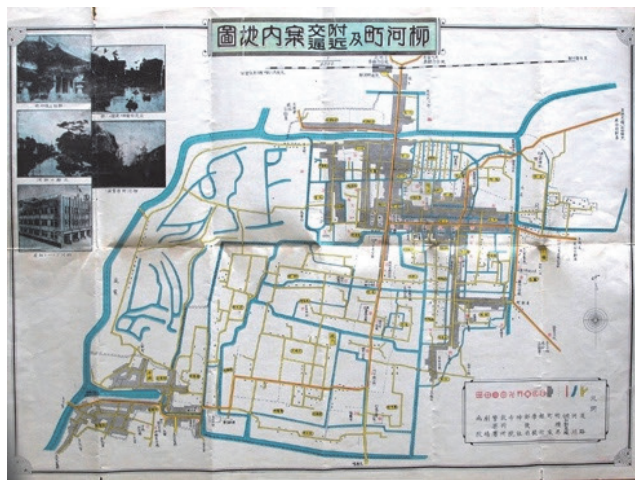


菊地研究室『図解柳川』より

No.15



中心を失ったことです。同時にこの時代には武家地というものが役割を失っていきま  
すので、それが農地に転用されていくんで  
すね。城内地区の農地化というのが非常に  
顕著でありまして、これは明治中期の土地  
利用の図ですけれども(No. 15)、多くの武家  
地が農地になっている。このように土地利  
用に関してはかなり変化がみられるので  
すが、土地の割り方、地割については近世の状  
況が継承されているということがわかりま  
す。



No.16

これは昭和初期の交通案内図です  
(No. 16)。もう城堀がなくなってます。昭和  
3年に天守閣付近が公園になって、城堀が埋  
め立てられて、田んぼになるわけですね。グ  
レーで塗られているのが町ですが、柳河地  
区に町があって、沖端地区に町があって、こ  
れらでは商業地あるいは港、町人地として  
機能しています。それに対し、城内は農村で  
す。

これは昭和31年の航空写真ですけれども



昭和31年(1956)の柳川

新柳川明証図会より

No.17

(No. 17)、手前が沖端で真ん中が城内、向こ  
う側が柳河地区です。城内は農村ですね、先  
ほどの明治よりもさらに屋敷の農地化が進  
んでいるということがわかると思います。

#### 4. 近代化による改変

そこからまた変化が起こったのは、戦後、  
特に高度成長期です。高度成長期には、農村  
化していた城内地区の再宅地化が起こりま  
す。他の都市ではスプロール現象といわれ  
て郊外で宅地化が起きるんですが、柳川で  
はそれがかつての中心部で起こったという  
わけです。

#### 城内地区の宅地化・細分化

明治以降、武家屋敷の農地化という土  
地利用に大きな変化はみられるが、地割  
については近世の状況が継承されていた。  
それが、高度成長期以降に再宅地化が  
おこり、土地の細分化が行われる。その  
際には現代的な宅地開発手法が採られ、  
その結果、水路と全く接することのない  
住まいが無数に生まれることになった。



明治29年(1897)  
土地利用状況



平成12年(2000)  
土地利用状況

図7:地割と土地利用の変化



菊地研究室『図解柳川』より

No.18

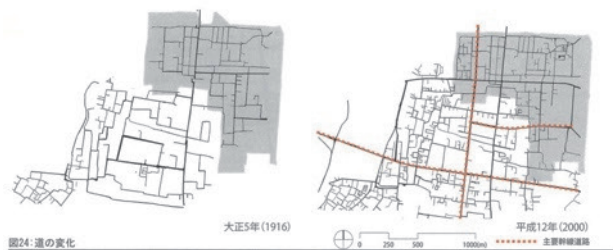
明治になって武家屋敷の農地化という土地利用の大きな変化が見られたんですが、地割については近世の状況が継承されていたんです。ところが、高度成長期の宅地化では、土地の細分化が起こるんですね(No. 18)。その際には現代的な宅地開発手法が取られたので、地表の水と接することのない住まいが無数に生まれることになる。これは近代化以前と大きな違いで、上下水道、この時は下水道はまだですね、いわゆる公共インフラの敷設で、堀割・水路の日常的機能っていうのが失われることになった。それが堀割衰退の要因の一つであると考えられます。

次に道路です。道路については、この時代に都市計画道路というのが地域内に敷設されます。柳川ではそれが、城下町の中に縦横等間隔に新設されていくわけです(No. 19)。柳川はもともと非常に計画性の高い城下町で、グリッド的な構成になっている。しかし、この時の道路は、もともと道でなかったところに新たに引かれているんです。その引き方ですが、縦と横に等間隔でグリッド状

#### 都市計画道路の建設

高度成長期の都市計画によって、それまで地域内の生活の軸線だった道が、車による通過交通のための計画道路に組み換えられる。柳川では、そのような計画道路が城下町の中にグリッド状

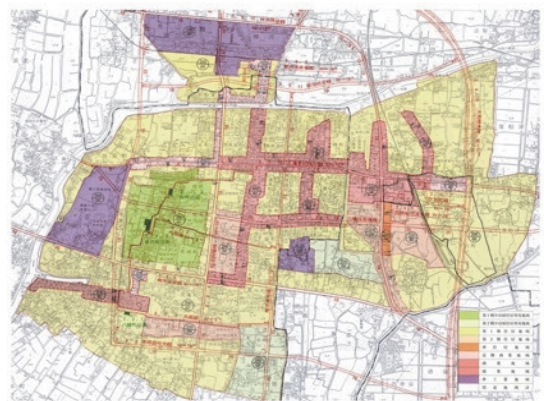
に新設されている。そのような車道が旧来の地域内を横断することにより、水路網が分断されるケースも見られる。



No.19

菊地研究室「図解柳川」より

にするというのが都市計画の理想とする道路の形だった。そういうような道路が新設されることによって、車道が旧来の地域内を横断することになって、水路網が分断されるようなケースがみられます。道路はだいたい 500 メートル間隔で引かれます。城下町柳川は、とてもユニークな都市構造を持っていたんですけども、高度成長期の都市計画っていうのは、全国画一的なモデルに組み替える作業だったんですね。



No.20

ちなみに、この都市計画図(No. 20)には、堀割水路が表現されていません。つまり、この時代には水路は都市計画の対象になっていない。そういう考え方で建設された道路なんですね。

次に、水路の改変について、少し広域的にみていきます。以前の水路は細かな水のネットワークでした。その水路の機能は、大きくは農地への灌漑ですので、圃場整備事業の一環として改変が行われていきます。小さな技術の集積だったものが、大きな施設に変えられていくわけです。この薄い水

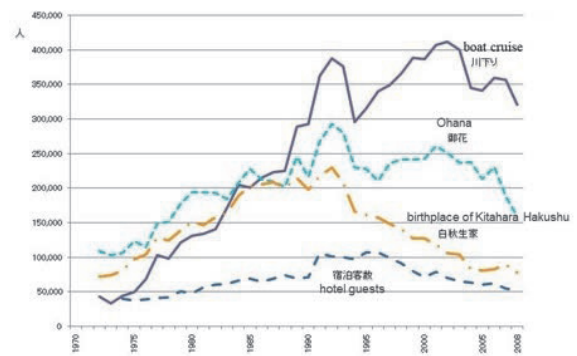


No.21

色のダブルラインが国営幹線水路ですね (No. 21)。この時期にはクリークを統廃合して合理化したり、アオ取水がやめられたり、そのような変更が行われるんです。ちょっと誤解をされないように申し上げますですね、こういう近代化による改善は大きなメリットがあったんです。それまでの不便や厄介ごとの多くが解消されました。ただ、失ったものもあるわけです。

掘割は近代化によって色々な機能を失いましたが、その一方で、観光資源という新たな役割が与えられるようになりました。柳川の外の人にとっては、柳川といえば掘割、川下りなわけです。観光資源としての掘割の使い方ですけども、日常の川下りの他に、2月初めから4月初めまで行われる「柳川雛祭りさげもんめぐり」があります。これはもともと家の中でやっていた行事が、掘割でもやられるようになった、1990年代だったと思います。さらに、8月初めには水祭りが行われます。カヌーレースやどんこ舟

The Number of Tourists



No.22

レース、掘割沿いでカフェとか灯籠祭り等々、近年いろいろなイベントが新しく企画されて活性化のためにやられている。11月にはよく知られている白秋祭水上パレード。でも、こういう観光としての川下りは意外に新しくて、1955年に始まっています。これは施設別の観光客数の動向を示したもののなんですけれども (No. 22)、当初、川下りは御花や白秋生家よりも少なかったんですね。それが1980年代ぐらいに逆転して、以降、川下りが突出した観光資源になっています。その一方で、各地域に毛細血管のように張り巡らされている水路は、それとは全く関係しない存在になったわけです。もともとは連続したネットワークとして機能していた主要な掘割と毛細血管の水路が、別々のものになったのです。

## 5. 掘割再生の取組

毛細血管と幹線が別の扱いをされるようになってきたと申し上げましたが、その結果として水が汚染されるという現象が起



#### 堀割に関する施策の変遷

- ・明治29(1896)「福岡県例（飲用河川取締規則）」制定
- ・昭和46(1971)「柳川市美観保存条例」制定
- ・昭和51(1976)「柳川市用排水路管理条例」公布
- ・昭和52(1977) 幹線水路以外の埋立ておよび下水溝への取り替え計画の議会承認
- ・昭和52(1977) 同計画破棄、「柳川市河川浄化計画」策定
- ・昭和53(1978)「伝統的文化都市環境保存地区整備事業」（国土庁）  
「同事業計画」（県・市）
- ・昭和56(1981) 柳川都市計画道路「外堀線」計画決定（遊歩道計画）
- ・昭和56(1981)「水辺の散歩道」計画（建設省補助事業）10年計画
- ・昭和57(1982) 公共下水道計画開始
- ・昭和58(1983)「うるおいのあるまちづくり」（自治省）優良公共団体
- ・昭和59(1984)「水の理想都市（アクアトピア）づくり事業」（建設省）選定
- ・昭和61(1986) 水辺の散歩道が「日本の道100選」（建設省）に認定
- ・平成5(1993) 城堀地区が都市景観大賞（建設省）受賞
- ・平成11(1999)「柳川市堀割を守り育てる条例」（愛称「水の憲法」）施行
- ・平成16(2004)「柳川市建築指導条例」公布・施行

#### No.23

き、これが深刻な問題になるんです。それに対して様々な施策が行われています（No. 23）。

その中で大きなターニングポイントになった年が、1977 年です。まずこの年に「幹線水路以外への埋め立てと下水溝への取替えの案」が議会承認されました。「水路の維持はもう諦めましょう」ということになったのです。この時代としては、必ずしも後ろ向きの決定ではなかったと思います。問題を解消するという前向きの判断だったと思います。

ところがそれを同年に計画破棄するんです。これはとても凄いことだと思います。補助事業でやれるものを破棄して、その代わりに「柳川市河川浄化計画」っていう、自分たちできれいにしていこうという計画を策定するわけです。この運動の中心を担ったのが広松伝さん。広松さんは当時下水路係の係長で、市長に堀割埋立計画を撤回することを直訴して方向転換するんです

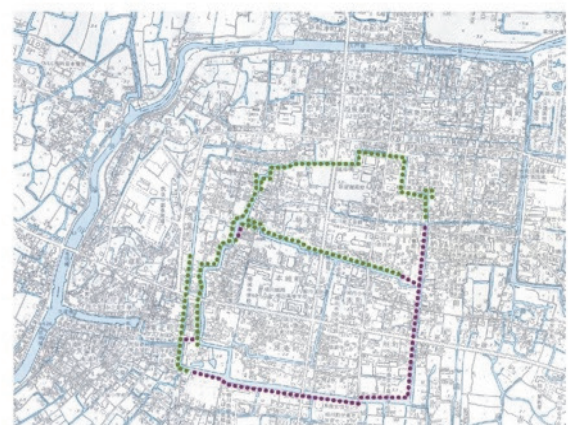


#### No.24

ね。それが柳川堀割物語のメインのエピソードになっているわけです。ちなみに、広松さんは初代の水の会の会長さんです。

これ（No. 24）は柳川の堀割を 1916 年、1948 年、2000 年と年代別に図化したものですが、1948 年から 2000 年にかけてほとんど水路が減っていないんです。他の都市では、この時期に水路がどんどん消されていきました。そんな時代に水路を持続したということが柳川最大のアイデンティティだろうと思います。

1977 年に政策が方向転換してからは、水路を軸にしたまちづくりが始められるよう



「水辺の散歩道」計画

#### No.25

になりました。その一つが「水辺の散歩道」、これは建設省の補助事業として行われたものです。それを見てみますと、掘割に沿って周回する歩道が計画されています(No. 25)。ただし、江戸時代にはこのような掘割に沿った道というのは、基本的になかったんです。掘割沿いの散歩道は、実は新しい要素で、歴史的空間ではないわけです。また、この道は川下りに使う大きな掘割沿いのみに計画されているということがわかるかと思います。これは初期につくられた内堀沿いの散歩道の様子ですけれども(No. 26)、日本の道百選にも選ばれていた



No.26



No.27

かと思いますが、なかなか優れたデザインだと思います。こちらはその後にした散歩道ですが(No. 27)、ややありきたりのデザインで、柳川という場所性があまり感じられないかもしれない。左下の写真は鬼童町の掘割沿いの道なんですけれども、ここでは歩道が掘割側につけられていて、住まいのほうには車道が直接面しています。ちょっとうがった見方をすれば、この歩道は住民ではなくもっぱら観光客向けにつくられている、と言えなくもない。

また、水辺にはこんな家が建つようになっています。デザイン云々はともかく、水辺を使うようになったのは一つの可能性だと思いますし、水浄化の取り組みの成果と言えるかもしれません。

広松さんは掘割の管理を市民の手でやっていこうと訴えていたわけなんですけれども、それが「柳川市掘割を守り育てる条例」通称「水の憲法」として、政策化されています。1999年のことですね。これがその前文なんですけれど、最後の方をちょっと読んでみます。「言うまでもなく、すべての人は、健康で安全かつ快適な生活を営むことのできる恵み豊かな水環境を享受する権利を有すると同時に、こうしたかけがえのない水環境を維持し、発展させ、将来の世代に継承していく責務と使命を有することを忘れてはならない。このような認識のもと、私たちは、市民、事業者、市が一



体となって、美しい柳川市の掘割を守り育て、市民が誇り得る郷土を育てることを決意し、水の憲法ともいえるこの条例を定める」。この文章、本当に素晴らしいと思います。

表1 水路に関する施策の変遷

|                           |      |                          |
|---------------------------|------|--------------------------|
| 水路の活用<br>+<br>水路の観光<br>利用 | M29  | 福岡県令（飲用河川取締規則）制定（～S60）：① |
|                           | S2～  | 上水道敷設                    |
|                           | S29  | 柳川市河川管理条例制定（～S35）：①      |
|                           | S30  | 柳川市有水路使用料条例制定（～S35）：①    |
|                           | S30頃 | 角下り観光事業化                 |
|                           | S35  | 柳川市用排水路管理条例制定（～S51）：①    |
|                           | S38  | 日向神ダム建設                  |
|                           | S43  | 幹線水路運送三ヵ年計画実施：②          |
|                           | S46  | 柳川市伝統美観保存条例制定：②          |
|                           | S51  | 柳川市用排水路管理条例制定：①          |
| 水路を中心<br>としたまち<br>づくり     | S52  | 下水路計画決定                  |
|                           |      | 河川浄化計画策定：③               |
|                           | S53  | 柳川市浄化槽取組要綱制定：③           |
|                           |      | 伝統的文化都市環境保存地区指定（国土庁）     |
|                           | S55  | 柳川市行政区等用排水路管理条例制定：③      |
|                           | S56  | 柳川市石けん使用推進要綱制定：③         |
|                           |      | 散歩道の都市計画決定               |
|                           | H6   | 柳川市クリーン条例制定：④            |
|                           | H10  | 柳川市掘割を守り育てる条例（水の憲法）制定：③  |
|                           | H16  | 柳川市建築指導条例制定：④            |

①水路の基本的な維持・利用のための施策  
②水路を観光資源として位置付けた施策  
③市民を水路維持の担い手として前面に打ち出した施策  
④まち全体の質の維持・向上を図った施策

丸茂悠・菊地成朗：水郷柳川における掘割空間の状況と水路に関する施策の影響

## No.28

これは今までの水路に関する施策の流れを整理したものですけれども（No. 28）、最初の頃は水路の基本的な維持や利用のための施策、制度や観光資源としての位置付けをした施策から、徐々に市民を水路維持の担い手と位置付け、水路を軸としたまちづくりに移ってきているのがわかります。

## 6. 掘割の新たな役割

最後にこれから私なりにコメントしたいと思います。掘割を考える上でのキーワードとして、「コモンズ」という概念があるかと思います。それをちょっと紹介します。この言葉は最近、建築でも注目されるようになっていますが、説明がなかなか難しく、ここに宇沢弘文の説明を挙げましたけれども、少しわかりにくい（No. 29）。

## コモンズ

ある特定の人々の集団あるいはコミュニティにとって、その生活上あるいは生存のために重要な役割を果たす希少資源そのものか、あるいはそのような希少資源を生み出すような特定の場所を限定して、その利用にかんして特定の規約を決めるような制度

管理：コモンズを構成する人々の集団ないしコミュニティから信託されている

所有権：単純な論理的な所有関係ではなく、特定の社会的条件のもとで、歴史的に規定された複雑な内容を持つ

（宇沢弘文：社会的共通資本）



高田の雁木通り：私有地を開き、連担させることにより、利用価値の高いパブリックスペースを生み出している。

## No.29

端折って言うと、現代の都市空間は公有地と私有地に明確に分けられているわけですが、伝統的にはその中間のような場所があったんですね。具体例として私がよく使うのが、越後高田の雁木通りです。雁木はアーケードのような空間ですが、ここは各家の私有地なんですね。それを出し合うことによって、屋根付きの通りを生み出しているわけです。新潟県の高田は多雪地帯で、冬に雪が降った時なんかこの空間が非常に重宝される。しかし、一軒でも作法を守らない家が出てくると雁木通りの価値というのは一気に消滅するわけですね。「コモンズ」はそういうことで成り立っています。

かつて柳川では、すべての家が水路ネットワークに関わっていたんですね。恩恵を受けるとともに、ある種の責任を負っていたわけで、柳川の掘割は、まさに「コモンズ」だというふうに言えると思います。

余談ですが、これはかつて我々が柳川の研究を始めた20年ぐらい前のまち歩きマップです（No. 30）。この図には川下りに使う堀





No.30



No.31

しか載っていないくて、細い水路は省略されています。こちらは2009年のまち歩きマップですが、こんなふうに昔の小路が固有名詞で記載されています(No. 31)。大きな堀だけでなく、細かい掘割が表現されている。まち歩きの方法がだいぶ変わったのかなと感心しました。ところが、最新版のまち歩きマップをホームページで確認したんですが、再び細かい堀が消えていますね。どうしたのかなと思いましたけれど。

これは『新柳川明証図会』に載っている水落としの時の写真ですが(No. 32)、実はこういう風景が価値あるものなんですね。川下

りも魅力的ですけども、一方でこういう水との本当の付き合い方こそ発信すべきだろうと思います。そうでないと、ディズニーラ



No.32

ンドと変わらなくなってしまっていて、川下りとジャングルクルーズが同じ意味になってしまう。ディズニーランドは、こういう裏で支える営みを徹底的に隠して、ファンタジーを生み出すわけですけども、柳川の場合は、フィクションやファンタジーではなくて、リアルな営みの全体像にこそ価値があるんで、そういう表面的なものにしてしまうと非常にもったいない気がします。

最後に、今後に向けてということで、思いつくことを言葉にしてみました。

- 掘割は柳川市民にとってアイデンティティである
- 掘割は環境問題を考える教科書である
- 掘割水路を維持してきたことにプライドを持つ
- 単に昔に戻ることが目標ではない
- 人や物語にも価値がある。ただし本当の物語を
- これからの時代の掘割の役割や仕組みを考える
- ビジョンを市民で共有し、社会に発信する

以上です。どうもありがとうございました。

## 調査報告①「汚れる前の柳川のお堀と暮らし」

九州大学大学院生 石本大歩 氏

九州大学修士1年石本大歩と申します。昨年まで菊地先生の研究室に所属しておりました。柳川の掘割を使っていた頃のことを知る人が段々少なくなっている現状を知りました。

今までの掘割の研究の締めくくりとして、高度経済成長以前の掘割に関わる生活や遊びについて、柳川地区、城内地区、沖端地区の3地区でグループインタビューという形で聞き取り調査を行いました。

今回、特徴的な掘割利用の様子やエピソードを抜粋して紹介いたします。今日の発表は以下のとおりになります。まず、地区ごとの特徴的な遊びや利用を紹介した後、柳川全体でかつての生活や遊びと現在との違いについて、お話をしたいと思います。最後に、私がこの調査を通じて考えたことを卒業設計として、掘割再生の提案をまとめましたのでご紹介いたします。

まずは、城内地区について、特徴的な遊びについてご紹介いたします。

城内



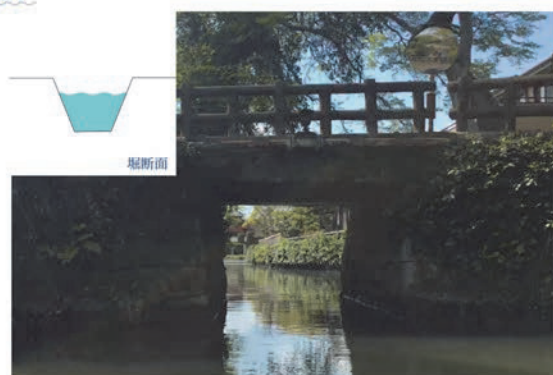
第1図

水の国誌、アルス、1943

第1図は、どこで何をしているシーンか分かりますか？これは、御花のところの沖端と城内の境のところです。この写真が重要なことをたくさん示しています。

1つ目は、飛び込んでいたシーンです。この場所でなぜ飛び込むことができたかというと、ここが城の堀だったからです。城の堀には、内堀と外堀があって城の防衛のためには幅と深さがあったそうです。城内地区のキーワードとしては、飛び込んで遊んでいたということでした。このように飛び込める場所が城内地区には何箇所もあったそうです。

城内



第2図

2つ目のキーワード2、飛び込んでいた場所の橋です。深かった城堀の中でも橋が飛び込む場所に使われていたそうです。橋の下は、「もたせ」の仕組みがあって、深く彫り込まれていました（第2図）。だからこそ飛び込む場所にも適していました。橋の下部分は絞り込まれているので、この流れは速くて飛び込んで流れていく遊びが行われたそうです。そんな水の仕組みも子供たちは分かっていた遊び場所を選んでいたというのが、おもしろいと感じました。

橋と言うのは、深さの特徴もあるのですが、誰の持ち物でもなくみんなの場所と言



う特徴からも子供たちが使いやすい場所であつたと考えられます。

3つ目が、飛び込んでいる場所が沖端と城内の境であつたことから、それぞれの地区の子供たちが、縄張りを主張してけんかもしていたそうです。それから、立花さんのお話によると城内の堀は流れが速くて台湾藻（ホテイアオイ）に乗って流れていく遊びをしていたそうです。今日、私も午前中川下りをしましたが、そこまでの流れはなかったような気がします。



第3図

第3図は、城内地区のヒアリングで集まった話を地図上にまとめたものになります。小学校の水泳の授業が堀で行われていたり、堀で取った魚を川魚屋さんに持って行ってお小遣いを稼いでいた話も聞けました。今のように公園などに遊び場が限られているのではなくて、遊び場所は町そのものだったというのが、当時の様子を知らない私でも、目に浮かんでくるようなヒアリングになりました。

次に、柳河地区について見てみます。第4図は、柳河地区の写真と思われるもので、この写真に石垣が映っていますが、古文書館周辺ではないかと推測しています。この写



第4図

西すじ、1997

真に写っているように、日々の茶碗洗いや洗濯や障子の張替えなど、生活の中で使われる掘割と言う認識が強かったのが、柳河地区の掘割です。これが、1日の掘割の水利用のスケジュールで午前の一番早いのが、飲料汲みや茶碗洗いで、次に洗濯、そして泳いだりして良いのが、学校から帰ってきてからだだったと聞いています。このルールは、自然に浸透していて、城内地区や沖端地区でも同じような話を聞くことができました。

このように生活の中で使われることが多かった掘割について、おもしろい話を聞くことができました。年齢が小さい時は、自宅付近の流れが少ない小さな堀で泳ぎ、大きくなると瀬高水門や沖端川など流れが速くて深い掘割や川で遊んでいたそうです。

自宅付近で親の目が届く汲水場が小さな子供の遊び場になっていたと思われます。小さい頃から水に親しんで、大きくなるにつれて流れの早い所や深い所で遊ぶなど、ステップアップして遊ぶようになったため、水の事故が少なかったと思われます。

第5図は、柳河地区全体のあそび場をプロットしたものです。これも城内地区と同様に遊び場所が広範囲に渡っています。



## 柳河



第5図

次に、沖端地区について、見ていきたいと  
思います。第6図は、どこか分かる方はいら  
っしゃいますか？

## 沖端



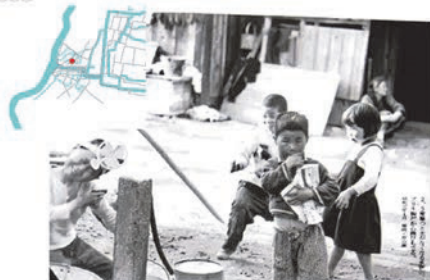
第6図

(会場から、矢留小学校北側の堀)

今、会場から答えが出た通り、矢留小学校  
前の堀で堀がプール替わりになっていたと  
いう話を聞いています。

次に第7図は、どこか分かる方がいらっ  
しゃいますか？

## 沖端



第7図

これは、船溜まりより北側にある地区の  
写真ではないかと思っています。堀ではな  
いのですが、当時の共同水道に子供達が集  
まって遊んでいる様子だと思います。

最後に、第8図は、どこか分かりますか？

## 沖端



第8図

船溜まりの渦で海苔漁に使われていた木  
桶で遊んでいる様子だと思います。今、3  
種類の写真をお見せしましたが、これ  
が私なりに沖端地区を分類してみたもの  
です。

まず、田畑の下流に位置する地区

次に、海の干満の影響を受ける地区

最後に、下流に水を届ける地区です。

まず、田畑の下流に位置する地区と下流  
に水を届ける地区を見ていきます。

船溜まりから見ると、北側の地区と南側  
の地区と言うのは、一見対照に見えるの  
ですが、掘割の特性は全く違ったものになっ  
ていることが分かっています。

まず、北側の地区から見ていくと、

城内地区や筑紫地区を経由して最終的に  
沖端川に流れ出す下流の地区であることが  
分かります。下流地区は、干満に合わせて水  
を排出するため滞留するというのが特徴で

す。この中でもひょうたん池と言われる水が溜まったような堀に子供たちが集まって、泳いだり釣りなどの遊びが行われたそうです。そこには、海と川の間にあるようなボラがいたとお聞きしています。

次に、南側の地区について見ていきます。

南側の地区と言うのは、城堀に由来する流れの強い堀で、下流の矢留地区と言ったところに給水する機能を備えた堀でした。その中でも流れの強い堀が、矢留小学校のプールとして使われたものです。今でも松などの木々があるのですが、昔と大きく違うのが、水位が岸のぎりぎりまであって泳げる深さがあったというのが見て取れます。

この南北の堀割の特性は、水利用にも表れています。これはかつての井戸と汲水場をプロットしたのですが、北側の堀は流れがなかったために井戸だったり共同汲水場で水をとることが多かったそうです。

逆に、南側では流れがあったために、個人の汲水場が多く、堀から直接取水することが多かったということが分かりました。

最後に、干満差の影響を受ける地区について見ていきたいと思います。

これは、二丁水門（井樋）の当時の写真になります。干潮時に排水を行うので、この水



第9図

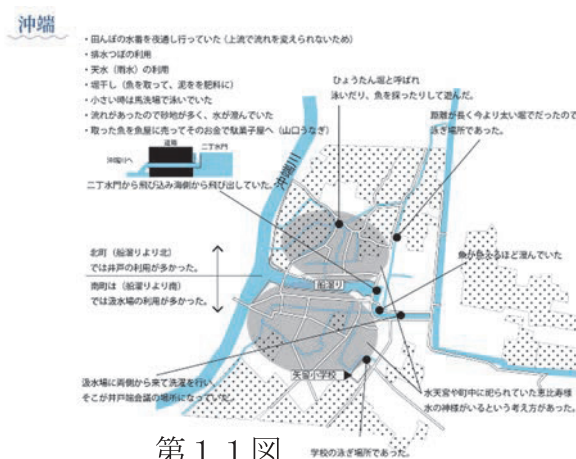
門に飛び込んで海側の水門から出てくるとい遊びが行われたそうですが、僕たちから考えますと信じられないような遊びが普通に行われていたことに僕は衝撃を受けました。

他にも、これは船溜まりのところで網干の下で鬼ごっこのような遊びをしている様子が見られました。（第10図）



第10図

また、水位が大きく変動するので、潮が引いた時には川底におりて、海が満ちると飛び込んでいたそうです。第11図は、沖端全体のプロットになります。



第11図

これまで紹介した写真を会場の後ろに展示していますので、ご興味ある方は見ていただくとありがたいです。

ここまで、色んな生活の様子や遊びの様子を紹介してきたのですが、柳川の堀割と



言うのは、地区ごとに様々なシステムであったり、水際の空間のようなものを持っていて、それぞれの使い方が様々でした。ひとつ一貫していたことは、当時の遊びをするためにも、使うためにももちろんですが、子供も大人も掘割の仕組みをよく理解していたということです。

今は、蛇口をひねればきれいな水道水が出てくるので、自分たちが使った水がどこへ行くのか知らないのですが、僕もその一人ですが、昔の柳川の人達は違いました。

なぜなら、掘割で使われた水は、その後下流の人も利用するからです。だからこそ使うためには、さっき紹介したようなスケジュールみたいなものがあつたりで、仕組みを知らずには使えない状態でした。その仕組みは、勉強して覚えるわけではなくて、少しずつ親や年上の人達が使う様子を見て自然と大切に使うようになっていきました。

今、僕たちに掘割をきれいにしようと言われても、みんな関心を持っているわけではありません。それは、使ってきた実感と言うものがないからだと思います。これから柳川の掘割をきれいにしていくためのスタートとしては、使っている実感を作ることではないかと思います。それは、学校の環境授業と言う形だけではなくて、大人が使っている様子を子供に自然な形で見せることだと思います。川下りとかの観光はもちろんですが、庭の水やりや釣りのような普段行われていることを子供たちに見せていくことが実感を作ることのスタートではないかと思います。

さっき紹介した写真にしたものをまとめたものですが、このように町中に堀の色が溢れていたら柳川に建つ建物も少しずつ変わっていくのではないかと僕は思います。

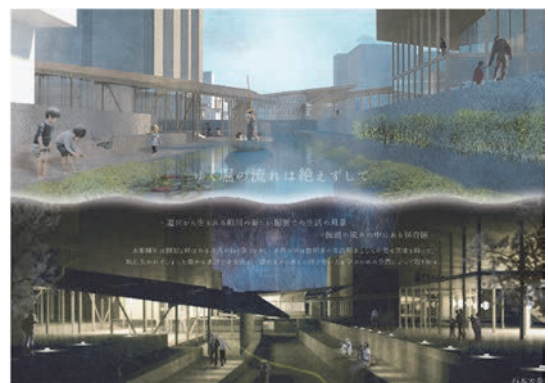
掘割が裏ではなく、表のようになるだろ



第12図

うし、どんどん利用される方法が増えるにつれてきれいにしなければという意識も少しずつ根付いていくのではないのでしょうか。

今回、紹介することができないのですが、少しずつ変わっていく柳川を想像して卒業設計を行いました。見る対象としての堀だったり、子供が下りていけるような堀岸の空間をデザインしています。この資料も会場の後ろに展示していますので、見ていただければありがたいです。



最後に、僕自身卒論を書くに当たって柳川を何度も訪れて、掘割とともにある場所が好きになり、卒業したら住みたいという気になりました。僕一人が住んでもきれいになるわけではありませんが、柳川の暮らしの実感を皆さんと一緒に作っていきたいと思います。

ありがとうございました。これで発表を終わります。



## 調査報告②「昭和20年代の水量変化の原因」

水の会 幹事 平野幸二

次に私の方から報告をさせていただきたいと思います。水の会の平野と申します。

実は去年の石本さんと一緒にグループインタビューに参加させていただきました。その時に参加された皆さんの言葉から昔の柳川の堀は綺麗だったとか、今より多く水が流れていたよという話が出ました。その原因として日向神ダムができたから減ったという方もいました。

ダムが出来たと言っても水はどこかに流さないといけないので、ダムが原因だとは思えないわけですね。

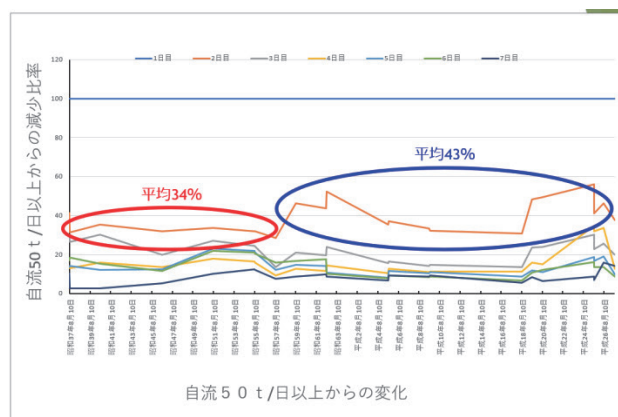
それで、去年の皆さん方の話から何故水が減ったのか調べてみようと思いました。ところが气象台に聞いてもアメダスの観測地が八女の近くでは黒木町にありますが、そのデータは昭和 52 年以前のものは無いわけです。どれだけ降水量があったかというのもわかりませんでした。

かろうじて日向神ダムは昭和 36 年から運用が開始されたわけですが、そのデータが今日アドバイザーで来ていただいている柳川みやま土木組合の佐々木さんから日向神ダムに流れ込む（毎日の）水の量、自流というらしいのですが、そのデータを頂きました。唯一あった昭和 36 年から日向神ダムに流れ込む水量のうち、8月と9月を調べ

てみました。

梅雨時期はずっと流れ込みますが、8月というのは降水量のメリハリがある時期です。雨の時はダムに一気に流れ込んで、その後は雨が降らなければ水が減っていくという状況だと思います。

ただこれだけでは、何をどういう状況になっているかわかりませんので、この図は8月の分ですけど、日量 50 トン以上流れ込んだところに赤印をつけました。その日からだんだん減って行くわけですね。それをまとめたのが第1図です。



第1図

50 トン以上が流れ込んだ日、その2日目、3日目、という風に減って行きます。絶対量が減っていくのでわかりにくいので、これを日量 50 トン以上流れ込んだ1日目の量を 100%として、2日目に何%に減少したかというのを見たものです。これをグラフにするとこういう線になります。50 トン以上の日から、これが1日目の 100%から、2日目はこれだけ、だいたい1日目の半分以上に減ります。そうすると何となくです

が、こっちは低いのですが、こっちは2日目に流れ込みが多いような気がします。

この昭和 57 年くらいまでは2日目に流れ込む量は1日目に多くても2日目には少ないのではなかろうかという見方もできないことはない。ここも統計的な分析をしないと正確なところわかりませんが、平均でいうと昭和 57 年までは1日目に対して2日目は 34%になっている。ところが昭和 57 年以降は2日目でも 43%で2日目も非常に流れ込みが多いということが言えるように思えます。

それでこの時期に八女の山森がどういう状況だったか調べてみました。林業従事者連絡協議会でつくられた「福岡県の林業史」というのがありました。そうしたら山も戦争前後で様子が大きく変わっています。戦時中は強制的にかなり伐採されています。色んな産業に、戦争を続けるために(木材が)必要だったのでしょう。

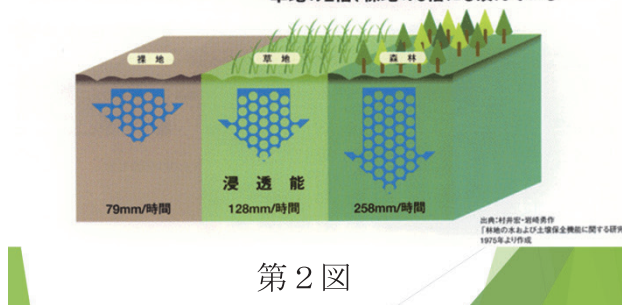
そして、伐ったら植えるのが山の循環の流れですが、戦時中の人手不足によって人が足りないがために植林がなおざりにされ、とにかく伐れということで、植林が追いつかない状況だったようです。

戦後になると農地解放がされました。同じように林野も解放されるという噂が流れたそうです。それで国有地や県有地以外の民有地では木を植えるよりも、とにかく解放(没収)される前に早く伐ってしまえと、さ

らに一気に伐採が進んだそうです。これが昭和 23 年ですが、この時期の米軍の航空写真でもハゲ山状態になっていました。

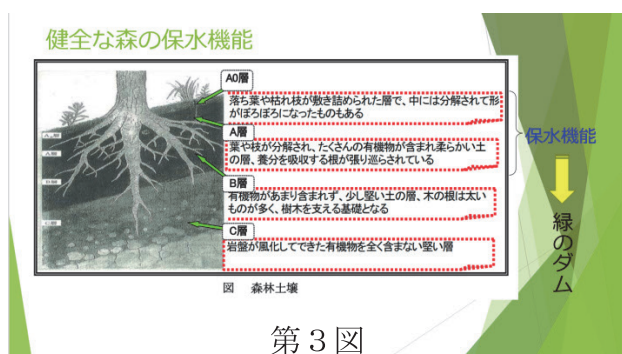
戦後復興の時期では、八女の木は年輪の間隔が荒くて建築用としては釘が抜けやすいため不向きでしたが、電柱用としてかなり伐採されたそうです。このように、戦中戦後にかけて一気に伐採が進み植林が追いつかず、一気にハゲ山が増えてきたようです。

●森林の土壌が雨水を浸透させる能力(浸透能)は、草地の2倍、裸地の3倍にも及んでいる



第2図

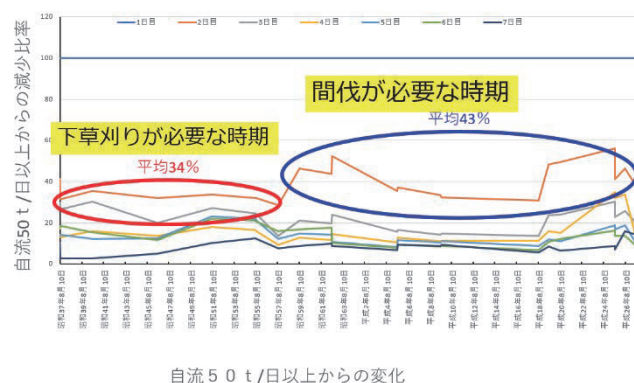
第2図は、山の土壌がどのように水を吸うかというのを林野庁のホームページから引用したものです。何も植わっていない裸地ですと、雨水が1時間に 79 ミリしか吸い込むことができません。草地ですと 128 ミリ、健全な森林の場合は 258 ミリ吸うことができます。大雨の時は時間雨量 100 ミリが1時間 2 時間程度でしたら森林がちゃんと吸収してくれます。



第3図

第3図は、山の土の断面ですが、表面とその下の層、腐葉土と言われるところが発達していると水を吸収してくれるということになっています。つまり保水機能があります。だから森は緑のダムと言われています。ところが健全な山、下草を刈り間伐をして土がふかふかとしたところは十分な水を貯えることができますが、植林したての育成林や間伐が十分にされず真っ暗な状態で下草も生えないようなところでは、土が吸水をほとんどせず水がどんどん流れて出てしまいます。

それでこのデータを見ると戦争直後に一気に伐採がされ、その後植林が進んできました。これは森でいうと若い状態、下草刈りが必要な時期になります。ですが下草があってまだ保水機能があるのではないかと思います。ところが昭和50年代の後半からは間伐が必要な時期になります。この時期にちゃんと間伐をしておけばよいのですが、一気に植えたということもあって、あるいは山の人口が減って担い手が減って、山の間伐が追いつかない。おまけに材価が安く



第4図

伐ってもカネにならないということで管理が行き届かない森が増えてしまいました。そして緑のダムが緑の砂漠になった山が増えたのではないかと考えました。

こういったことは、昭和30年代頃に水が減った直接的な原因とははっきり分かりませんでした。山が水を貯え渇水期には水を流すという山の保水力と当時の山の状態が何らかの関係があると考えても不思議ではないはずです。

このように考えると柳川の水というのも山の影響を受けているのではないかと考えます。それで私たちの暮らしというのは、広松伝さんもよく言われていたのは、「海は山の恋人だ。山の水が貯えられ渇水期には湧き水が柳川の方に来る。柳川にとって森をどう守っていくのかが大事だ」と。矢部村に柳川市民の森というものをつくって山を守っていこうという取り組みもあります。さらに山との結びつきを強めるためには、やはり平地に住む私たちも間伐をする山の支援をすべきではないかと思う。例えば間伐材を掘割の護岸に使うとか森づくりに対して柳川から支援をすとか、今後は山との結びつきを強めながら掘割に水が来る恩恵と、我々が、水を大事にし柳川の掘割を守っていこうという取組を一緒になって考えていこうということです。

掘割の水量が減少したハッキリとした原因までは、たどり着きませんでしたけれど、問題提起というところで発表を終わらせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。



## グループ談義

### A グループ      テーマ「景観」

**司会：**私は A グループの進行させていただきます水の会の平野です。よろしくお願いします。書記は、井上さんと金子さんです。二人には、皆さんの発言を簡単にポストイットに書いていただき、この模造紙に貼り付けていきます。時間は、だいたい 40 分を目処に話を進めます。十分ではありませんので、話される場合は簡潔にお願いいたします。それから、皆さん方の発言は、報告書としてまとめたいので、録音をさせていただきますけれども、よろしいですか？よろしくお願いします。

このグループでは、「景観」というテーマでお話をさせていただきます。景観といっても、どこから話を切り出そうか迷いましたが、今日は地元の大先輩たちが来られておりますので、昔の柳川の掘割を中心とした景観がどうだったか、今との違いをまず初めに口火を切っていただければと思います。

**A：**柳川の西鉄駅の近くのことですけども、そこに二ツ川が流れております。私は、戦争中の小学校の時によく遊びに行きました。現在は、掘割の南側の方が道路になっていますが、その頃は、柳が植えられていてその横に住宅がずらっとありました。だから先程の話のように、そこに飛び込んでいました。ドロ橋といって小さな橋があったので

すけども、そこでも泳いでいました。三柱神社の欄干橋辺りまで泳いでいていました。今は川下りの船が置いてあるから全然そんな雰囲気ではないのですが、昔はそういう風な景観がありました。

**司会：**昔の景観で思い出に残っていることはありますか。

**B：**私は柳河校区に住む 85 歳、生粋の柳河人です。ほとんど田んぼがありません。家の裏には必ず掘割があって水が流れておりました。先程、先生も言われたように、家と家の裏に小さな 1 メートルか 1 メートル 50 センチぐらいの掘割がたくさんありました。そこまできれいな水が流れていました。魚も泳いでいました。立花会長もいわれていた「べんちょこ」という、これぐらいの魚で「カワタナゴ」がたくさんおりました。

ちょっとした 5 メートルぐらいの広い掘割で泳いでいましたが、自分たちの泳ぐ場所はそれぞれの地区で決まっておりました。戦前の話です。

小学校 4 年生の時に終戦を迎えました。昔はどこでも泳げた掘割が、今は水が死んでしまいました。その大きな要因の一つは、掘割を利用しなくなってしまったことだと思います。なぜ利用しなくなったかというと、科学的根拠はありませんが、ホリドールという農薬が普及しましてね、それが堀に流れてきて、それで魚が死んでしまう。生態系が崩れてしまい、それで結局利用で

きなくなって泳ぐこともできない、魚をとったとしても、食べることができない。洗濯もできない。それで、掘割を利用しなくなる。だんだんゴミを捨てたりする。そうして、死んだ川に、死んだ掘割になったと思います。それを広松さんのお陰で、やっと再生しそうになっている。やっぱりそういう意味では、経験者として分かりますけど、今でも魚をとって食べることが出来ないの、生活で利用できるようにしていかないと、なかなか再生できないのではないかと感じています。

**A:** 我々は川で泳ぐのが普通だった。踏切のところから欄干橋を通り、ずっと泳いで新町の水門まで行っていました。その水門から飛び込んでいました。そこが一番深かったです。先ほど掘割の水が少なくなってきたということですが、ダムができる以前は道のすれすれまで水がありました。

**B:** 先ほどね日向神ダムは関係ないということですが、山に雨が降って水が流れるでしょ。最終的には川に流れて海に行く。ダムができる前は流れを調整(コントロール)できなかった。調整できないので川から柳川の掘割に一気に流れるときは、そこに溜まった泥を洗い流すために、掘割は下が砂地だったのです。今はダムで調整して強い流れが少ない。

**C:** 私は昭代ですが先ほどの先生の話と状況が違います。同じ柳川にしても、大和町の方

と旧城下町とまた違う。同じ地域でも、二ツ川と塩塚川と太田川とか、景観としては異なります。

名勝指定の時、柳川市全体をどうするつもりなのか。我々に説明があったのは、柳川の景観は、北原白秋の「水の構図」の世界にしようじゃないかということでした。しかし、本気で名勝指定としてふさわしい景観にする気があるのか。今日は聞きにきました。

**司会:** 今日先生の話聞いて私が感じたのは、景観というと、ランドスケープ、風景、キレイな自然の形を思い浮かべますが、柳川の景観と言ったらそうではなくて、昔の暮らしや活用とか、情景と言ったほうがいいと思います。柳川の情景というのは、ただ単に風景画ではなく、そこに暮らしがあり遊びがあり、その中でどのような構造物、堀岸、橋、家並み、それがセットになっているような気がします。だから、景観だけ論議しても、なんかちょっと違うなあという感じがします。その中にやはり、暮らしがどう関わっていくのか、その中でどのような活用があり、どのような遊びをしていたか。そこから、柳川が目指すべき景観がでてくるのではなかろうかと思います。

**B:** 形姿というのは、簡単に変えることができない。全部を取り戻すことはできないと思う。どこかの公園でモデル的につくって、そこで魚を釣ったり、泳ぐのは無理にして

も、昔の遊びができるような場所を作るといいんじゃないかな。

**司会**：そうしたモデル的な場所を作ろうというのは、市の事業であったと思います。街路樹として柳を植えるということはあるみたいですけど。

**D**：この事業は今、都市計画が担当しています。柳川全体を田園エリアとか川下りエリアとか景観エリアとか、グループ分けされています。私は蒲池ですが、それこそ昔の三潞郡です。昔、親から言われていたのは、蒲池と旧柳川では全然水の使い方が違う。蒲池では、水は基本的に流れる水ではなく、農業用水としてためている。今も蒲池は田植え前に水を引き込んで、水をためる。柳川は流れ堀。上流から下流で、山と海の関係ですから、昔からそういう関係では矢部川から来て沖端川を通して二ツ川、その間に急な川がない。あらかたきれいな水が、今も流れている。蒲池の水を見ると茶色になってたまっている。地域によっていろんな水の活用方法がある。

**A**：景観を3つのゾーンに分けた方が話をしやすい。基調講演でも言われたように、柳川は城下町として話をされたわけです。そういう名勝指定を教えてほしい。尚且つ今おっしゃったように、どういう風に今後の計画を立てているのか。蒲池のような1000年以上も続く田んぼの歴史を持っているところと状況が違ってくると思う。

**B**：地域によって変わってくる。今日ここに若人たちがおられるが、柳川のどういうところがいいかというのを聞きたい。

**司会**：それを聞きたいですね。柳川は初めてですか。

**D**：柳川というのは、川下りコースを掘割として、イメージされているだろうと思います。ただ、蒲池とかに行くとほんと昔からの堀の形がまだまだ残っていて、それを見ると見方が変わってくると思う。

**司会**：今日柳川に初めて来た印象でいいです、あるいは情報として今まで聞いていた話でもいいですから、実際に柳川の掘割を見て、どう感じましたか。

**E（市外）**：今日川下り舟に乗せてもらいました。柳川のイメージとしては、沖端では結構柳がいっぱい堀岸に生えているようなところがあるでしょう。その柳並木が、他の地区でも続いているイメージがあったんですけど、川下りに乗ってみたり、街を見ていたりしたら、結構柳の間隔が広くて、（柳は多くない）ちょっと思ったのと違って少し印象が違うところがありました。

**司会**：映像で柳川が映るところは沖端の柳の道だから、その印象が強いのでしょうかね。

**C**：昭和50年に柳川に戻ってきて川下り掘割を見たときに、日本全国で最悪の部類でした。ゴミは捨ててあるは、メタンはブクブク上がるは、汚い水の方がいっぱいね、こういう中でするのかいなと思ってね。そ



したらたまたま柳川に帰ってきて仕事する機会があった時、海外に行っていた先輩たちが何人か来て川下りをしましたが、恥ずかしくてたまりませんでした。その連中が船を降りた後、昭代とか大和干拓を車から見て、この汚れはなんとかきれいにできるだろう。景観は簡単に変えることができないが、この柳川の景観には、柳がありヤブがあり、昭和の景観が残っているのを見て、連中がこれはオランダに勝つぞ、と言ってくれたのです。オックスフォードやケンブリッジにも勝つぞと、お前頑張れと。それで、ここに骨を埋めようと思った。ところがそれから10年したら、護岸はコンクリートになるは、柳を切ってくれるなどと言ってもバサバサ切っていくし、柳を植えるのをやめてくれとかね。今の味気ないことになってしまった。

**司会：**課題は、護岸、柳伐採ですね。

**C：**だから今日は先生がハッパかけてくれるのかと期待した。柳川市はどうしようとしているのかと言ってね。城下町の地区は、国や県からお金を助成してもらい、名勝指定されたような計画で柳川市が昭和の初めのような景観を取り戻すことを実行してもらいたい。

**司会：**白秋時代の景観を、というのが目標ですね。

**C：**そういうことで、景観のチームはお願いします。田園のほうは、又田園で考えましょ

う。

**司会：**市外から来られた若い方たちは、柳川の第一印象はどうでした。問題点でもいいですよ。

**F（市外）：**どっちかというと、観光地化されているイメージがすごく強かったので、川下りだったりとか、有名な店がたくさんあったりとか、そういうイメージだった。掘割が、生活と結びついているというよりも、観光というか、外部からくる人をターゲットにするようにしているので、この街は、船が通っていて、観光する人がたくさんいるみたいな印象なので、そんなに生活と結びついている感じはしない。

**司会：**もし、横で、水汲場で、ものを洗ったり、あるいは子供たちが泳いだり、そういう堀だとどう感じます。それは良くないことですか？

**F（市外）：**観光と、両立できないこともない。そういう感じであれば全然いいと思います。

**司会：**暮らしの場が観光や景観になっているところは、全国的にも他にはあまりないと思います。観光では観光のための見せる物というイメージがある。掘割は暮らしの場を観光や景観にするところまでまだいってないと思います。市外から来られたGさんはどう思われました。

**G（市外）：**今回初めて柳川に来て、第一印象として、川がきれいだなと思います。皆さ

んと似たような感じですけど、観光としての掘割に重きを置いている感じがして、地域住民との関わりをあまり感じられない。

**司会：**観光のための掘割になっているということですね。柳川市に住んでいる人は、堀との関係が見えなかったということですね。もしそれがもっと暮らしの中の掘割、さっき言ったように汲水場で、茶碗は今洗えないかもしれないけど、ものを洗ったり、釣りをしたり、遊ぶ人が出てきて、堀で何かしらしていたら、もっと違う雰囲気になる。その雰囲気を、G さんにとっては良い印象ですか、それともあまり良くない印象ですか

**G（市外）：**いい印象です

**A：**昔から堀岸で洗い物をする所が、現在も残っています。私が子どもの時は、水道がないので、午前中は水を汲むから、絶対に入ってはいけない。学校から帰ってきたらジャバジャバ泳いでも問題ない。だからやっぱり家の横の掘割に降りる汲水場があって、そこで家庭の洗い物をしていた時代がありました。

**司会：**市外から来られた H さん、柳川は初めてですか。

**H（市外）：**私も初めて柳川に来て、印象としては観光地って感じだなあと思ったのですけど、そもそも私福岡出身じゃありません。それでも、福岡来て、柳川はすごく有名な観光地として知っていたくらい有名ですけど、もっと地域住民と掘割の関わりが見

えたらいいなと思いました。観光地としては有名なのですが、実際に地域住民の方が今まで掘割と関わってきたかというのが、今日講演を聞かないとわからなかった。それをもっと前面に出して、昔みたいには難しいかもしれないけど、観光地と場所を分けて、利用方法を変えて、例えばさっきお話にあった花の水やりをすとか、別のやり方を考えたらいいのかなと思いました。

**司会：**それでは今の、柳川の堀の景観上の課題は何だと思いますか。

**D：**もっと水路の水をきれいにするということのも大事ですけども、住民の方たちも掘割を愛すると言う形が見えてくると良い気がします。抽象的な言い方になりますけど、基本的には昔の城下町に戻していく方がいいかな、昔の古い町に戻していくために掘割がどういう形が良いかを考えていけばいいのかな。

**司会：**今、柳川の掘割を愛するという言葉が出ましたが、どうしたら愛することができると思います？先輩たちのご意見は？

**A：**もっと水に親しめるように堀との境に柵をしないというのが大事だと思う。当時は掘割の水は下水道みたいなものでした。それで、下水が流れ込まないようにしても、上水道に戻すことは不可能だと思う。じゃあどうするかと、中水道という考え方があり、我々は泳げるような堀にしようと、ずっと今までやって来たつもりです。

ただ、農薬の問題があり、昔の子どものように泳ごうと言えない場合がある。だから、農薬の使用をやめてくださいというのは言うけども、難しい面がある。昔の矢留小学校の横の堀のように泳げるようにしようとして、堀岸がもっと親しみやすいようになれば、掘割をみんな大事にしてくれる人が増えるのではないかと思う。

**司会:** 他の方は、もっと柳川の掘割に愛着を持つためにどうしたら良いと思いますか？

**B:** 柳川の人と外部の人とでは考え方が違うと思う。外部の方が、柳川というイメージがどんなものかと、それをまず知ることが大事。それを知って、対応していくべきじゃないでしょうか。先ほどあなたがおっしゃったように、柳と川、冒頭に彼が言った通り、柳川橋のところからこちらの水門のところまで堀岸に柳の大きな木が垂れ下がってね、絵になる柳川、これが柳川だ。木もね、若返ってきた、私は柳川にとってね、柳をあまり大事にしてないと思う。柳川の方は、まず柳を大事に、柳の川だから、やっぱり外部から来た方は、川下りのところにいっぱい柳があるじゃないか、と思っておられる。

**司会:** なるほど、やっぱり柳川の景観の中心になるべきは、柳ということですね。

**B:** やっぱり掘割にもっと柳を植えないといけないと思う。それは簡単にできると思います。観光の町というのは、外部の人が、まずどんな風な柳川を思っておられるのか、

簡単に出来そうなものをまず選んで、やっていくということも一つの方法だと思います。

**司会:** これからの柳川はこうしたらいいのではないかというアイデアありますか？

**I (市外):** アイデアではないのですが、さっき紹介されたことすごく共感したという話ですけど、柳川の人の暮らしを見てというのをどなたかがされていて、水門を板で閉めるやつがあるじゃないですか。あのような景色が見られたらすごくいいなと共感しました。

**司会:** それはニュースにはなるけど、それを事前に広く発信をして、ここの水門を何日の何時に閉めるので、見られますよというような情報発信ですね。

**I (市外):** そういうのがあったらすごくいいなと思います。

**B:** 2月の水落ちですね。あそこを閉めたら柳川の町は掘割に水がなくなりますが、スモンの外は水浸しになる。一つの防御の策としてできたみたいです。

**司会:** 堀干しの時の掃除にも来てもらうのもいいんじゃないでしょうか。彼らみたいに、そう言うのが興味ある人も多い。

**D:** 今は2月に水門を閉めて市街地の水を落としてクリークの掃除や天日干しをして水路の保守管理、メンテナンスをしていますが、江戸時代にはお城を守るために、水門を閉めたら攻撃されないような仕組み。



**司会：**堀干しは年に1回やっているの、その情報を発信して、是非皆さんにも来ていただきたいですね。そういう観光的なものだけでなく、堀掃除などの堀を守るための行事に参加してもらおうとありがたい。時間もあまりありませんが、他にアイデアはないですか。

**A：**柳の植樹という話がありましたけど、皆さんに一本ずつ植えてもらうというのはどうでしょうか。堀は、930キロあるわけだから植えるところはたっぷりあります。

**司会：**自分が植えると愛着も湧いてくるでしょうね。時間もないようですが、言い残したことはないですか？もっとこうしたらいいのではないとか、あるいは今の課題でも欠点でもいいです。

**D：**田中吉政公が柳川に来る15年前に作った街があつて滋賀県の近江八幡というところなんですけど、時代劇の撮影なんかに使われるところですね。そういう場所で私も話に聞いたのですが、近江八幡に行ったら皆さん堀がいいんですよと言われます。それは、堀を埋める計画が持ち上がった時に、柳川もやったと思いますけど、住民の人たちが物凄い愛着を持って抵抗したそうです。そして、自分の死に場所にしたいぐらいの愛着のある街に変わったのです。近江八幡にいったらすごくいい町で、誰もが感動して帰るような町ですよ。これを柳川に置き換えたらどのような形にすれば良いのかな

と、柳川もそういう風にならないかなと思います。

**司会：**やはり堀割の景観の大部分は岸の形状だと思うのですが、これがコンクリート護岸なら興醒めですが、例えば葦や菰で覆われた堀岸とか、木柵の堀岸とか、そういう一工夫で、印象が随分変わってくるはずです。個人的な意見ですが、もっと自然に優しく見た目にもいい岸になってほしいなあと思います。皆さん、長時間にわたりありがとうございました。



A グループ談義



A グループ発表

## B グループ      テーマ「活用」

**司会**：最初は、昔の堀はどうだったかを、皆さんにお聞きしたいと思います。

**A**：質問！分け方ですけど、ここに活用という言葉が書いてありますけど、この活用には商用的な活用か、生活飲用とかいう活用か、それと運搬とか。それをまたかけられたらどうですかね、縦軸に。ただの活用という言葉だけではなくて。例えば、商業とか生活とか、観光というのは昔はなかったと思いますんで。

**司会**：最初は昔の堀の話になりますんで、

**B**：商業があるなら農業も書かんなら、

**C**：産業でいいのでは

**B**：矢留小学校のところとか、土橋のところとかで泳いどるよ。6尺の布を巻いて泳ぎよった。御花の白壁のところ、沖端と城内の境です。あそこの橋を今でも土橋と言う。あそこから飛び込んでいた。

**D**：私たちの子供の時代は、そこまでの利用はしていなかった。川と触れ合うという事で、親から魚釣りとかの遊び方は習うので、そうして使い方というのは、私が30年、40年ぐらい前ですね、その頃はそういう状況だった、泳いでいるということはなかったです。二ッ川とかそういうところには行くけど、こっちの方ではないですよ。

**E**：上流の方は、私は男性 H さんよりさらに5年遡りますけれども、遊びよったです。二ッ河小学校だったので、沖端川が目の前

にあるじゃないですか、授業の時にしじみをとりに行った記憶があります。

**F**：自分もですので、二ッ川のもらい橋って知ってありますか。あの辺りに親戚がいるんですけども、もらい橋のところで泳ぎよったです。高学年になると沖端川で泳ぐ。低学年は小さい川。上級生になると大きい河川に移動しました。

**D**：逆に私たちの時代になると、学校にプールがあったり、そうした施設ができるので、そういうところで泳ぐことができる。豊かになってきたから。

**F**：それと、男性 A さんが言われたように土橋のところは、今現在でも泳げるような状況ではない。昔泳げたけど今は泳げないというところがたくさんある。それはなんですかということ。

**B**：まだ沖端の学校のあったところは、真ん中あたりは深いけど、前はあまり変わらんやった。

**F**：クリークの深さはほとんど変わってないけど、溜まっている水が全然違う。

**司会**：もっと水があって高かったから、近くにあった感じ。

**E**：確かにプールはあったんですけど、普通に水に入ったり川に入ったりしよったですね。それこそ、飛び込んだと言われていましたけど、私たちは沖端川の三村橋のところから飛び込んでいましたね。もう今は川で泳いでるところは見かけないですね。

**A:** 商業という話のところで、日吉神社のところに水上売店みたいなのところがあるじゃないですか。あれは許可とかなんかいるんですか。

**G:** あれは水路占用許可がいる。

**A:** どこが許認可出してるの。

**G:** 今の段階では、土木組合だと思います。

**A:** 土木組合に出せば大丈夫？許可する基準とかどうなってるんですか。

**G:** 基準などではなく、占用だけです。占有ではなく、占用面積を出していただいて、それについて書かれるというカタチです。基準などはない。

**A:** 水上売店が今は、コロナでやめてるかやってるか知らないけれども、あ～言うのをどんどん広げていけば、何かできるんですか。

**G:** 広げると言っても、いろんなこんなもう、柳川に観光できておられるお客について、やっているという状況でしょうが、今は。川下りをされている方に対してのサービスでしょ。それを幾つでも作ったらどうなるかということも考えないといけない。

**A:** 誰でも始めていいのかなと思ひまして。あそこは観光課とか観光協会とかの公のところやってるんですか？

**G:** 個人です。

**A:** 個人やったら、誰でも始めてもね、お堀の活性化のためにそういうのもしていいなら、許可基準、景観にはそういうことは決めていないということ。

**G:** 今の段階では、詳細には決めていないです。

**A:** どうやって決めたの？既得権で？

**G:** 水路占用で許可を出しているという形になっています。公共性とかではなく、あれはあくまで個人でしてる。観光庁でしているものではない。あくまで個人。公共機関ではないです。

**A:** ではその水路占用許可が、許可基準ということですね。道路にある露店商のようなものですね。中洲でもやってるような露店、おでんとかいろいろ出して見ても一つの活用じゃないかなと思います。

**司会:** 水辺で遊ばれていた頃って、生活はどんな感じでしたでしょうか。

**B:** 昔は、東魚屋町から沖端から魚ばとって、船で上に上ってきて、魚ば売りよったけん、東魚屋町という。西魚屋町もあるので、今は西町とか東町とか言いますけど。もともとは東魚屋町、西魚屋町で魚を売りよんなはったけん。私たちの頃は、そういう話を聞いていただけ、車が広がって、車とか自転車とかが多かった。

**H:** 昔の方が言われるのは、道路のほうの玄関と堀側の裏玄関とがあって、裏玄関に小舟があって行き来できていた。道路がなくて整備されていないときは、重いものは船で運べるから、昭和の時代は道路が整備されて、車の方が便利がいいから、車を使うようになった。飲み水としても昔は使ってい



たが使わなくなった。自然と便利な方にみんな流れて行ったんじゃないかなという気がしますね。私は昭和 50 年生まれなんですけど、基本今の生活スタイルとほぼ一緒。川下りが見えるぐらいで、今の時代に近いようなカタチでした。昔から使われているのは、農業ですよ。農業は間違いなく、掘割の水で育てているからですね。農業は今でも使ってます。普通にポンプで汲み上げて。ただですね、今ここで話をしているところなんですけど、農地化から都市化に変わってきているので、そのエリアには基本ないですけど、下流部の両開地区とか干拓地区とかに水を送り込んでいますから、そういった意味でもその水は今も、昔から使っているのは間違いありません。それが有明海にあって海苔の養殖などにも十分使われているので、そういった意味では、山から下流部にずっと続いているのかなと思います。直接的に目に見えたものではないけど。

**司会:** 例えば今船の話ですけど、船は下まで行ったら戻らと思うんですけど、例えば下流に魚を持って行こうとはできないんですか。

**D:** それが、さっき話されていた、水質の浄化とかがないから、結局汚いから食べないとか、そうした意味では、そこで獲れた魚に価値がないから、持っていくということにはならないと思う。昔は、それだけキレイだったからそれを持っていくとみんな欲しい

人がいたから商いとして成り立っていたんだと思います。清流でないところで獲れた魚を食べる人がいるかないかという問題だと思います。実際、魚の種類は昔と変わったけども、いるんですね、外来魚のブルーギルとか、そういったものが多いですけど、ただそれを食べますかと言った時に、食べないから商業として成り立たないけど、生活の中とかその他の部分では、釣りを楽しめる方はおられますよね。釣りは、違うカタチでやっていらっしゃる方はいると思います。食べるためではなく。

**A:** お堀を一級河川とか二級河川とかみたいに、まずランクつけるのも必要じゃないかと思うんです。今川下りコースというのは、どこの堀をどうしようかという時に、特定で、そうしないとお堀と言っても川下りコースのところをきれいにしておかないと、なんでかといえば、商業ベースで、お客さんが汚いのを見ていたら、ポリタンクみたいなものを見たりしていたら、だからさっき言ったように二級とか三級ぐらいまでランクをつけておいた方がいいと思う。

**司会:** 守るのに優先順位をつけるということですね。

**A:** そうしないと、最終的にはお金のかかる話なんで。お金と言う資源を有効に利用する。やみくもになんかするとか、そういうことも考えておかないといけない。理想もいいけど実務でやっていこうと思うなら、お

金は逃げられない。それだけのお金をどこから引っ張ってくるかと。例えば、100 円とか 50 円、京都の観光税のように、そのようにして原資を集めて、それをこれに使うとか、変なのに使ってもらったら、そういうことも考えないと。50 円なら 50 円でもいい、これ以外には使いませんよ、と。寄付するのと同じような、50 円と言っても、今川下りに何人来られているんですか。年間で 20 万人なら 100 円でいくらになりますか。2000 万円の原資になる。それをどうやってどこに使うか。今の人たちはやっぱりはっきりしとかんと嫌なんよね。税金取られて何に使われよかわからん。100 円でも結構大きいんじゃないの。舟会社も水上売店も営業しているということは利益があがっているからできる。そういうところから、なるだけいただく。

**司会：**今、川下りだったり、商売とか、そういう方達と連携して、

**A：**やっぱり、ほかからこっちに来てもらおうという時は、明朗会計しとかないといけない。明朗会計しておけば納得して、使ってくださいと言える。市の方は、福祉なんかに一番お金がかかると思うんで。これはこれに特化した 100 円ですよと。

**立花会長：**もちろん川下り会社とか水上売店とか、いろんな業者さんたちもそれはそれでいいんですけど。自分たちがどう使いたいのかという視点でお話していただくと、

もっと身近になるような気がする。どうなったら自分たちが使える。

**D：**昔は写真などを見ていると、堀で身近に遊ぶってテーマの中では、いろんな遊びをされていたんですけど、やっぱ時代がさっき言ったようにプールができたりすると、プールで良くなると、掘割じゃないけど、違う視点で、掘割の遊び方であったりとか、今だとよく、海辺に行くとサップであったりとか、カヌーであったりとか、遊び方があって、そういう今の遊び方を市民が自分たちで楽しめるようになると、新しい暮らしの形が生まれてくる。その新しい形が、人を魅了すると、人はそこに集まって来なくなるんじゃないかと。そうすることによって地域の価値を高めることができるんじゃないかなと、よく思うんですよね。なんか新しい形、必ず昔に戻れるようなことはなかなかない。今からの形というのは、何かは私もわからないんですが、それは地域の人たちが、何かをやることによって、今の時代というのは発信というのがいろいろあるじゃないですか。若い人たちはいろんなカタチで発信をして、世界的に伝えていける。そのカタチが生まれた時に、人というのは集まって来て、地域の価値が高まるんじゃないかな、理想的で主体的ではないですけど、昔みたいに地域の人が堀と接する機会というのが、一番やりやすいのは、遊びとか、そういう視点なのかなという気はしますけど。昔はも

ちろん生活というのがあったんでしょうけど。

**A:** 水道とかが発展したけんね、そりゃ昔に戻れと言っても今は水道のあるけんやん。子供たちも遊べっていうけど、遊んでて溺れたらどげんすつとというのもあるんで、もうそれは仕方がない。

**司会:** 今できることとして、サップとかが出てきてますけど、他に若い方の視点で、どういふのがあるかお聞きしてもいいですか。サップなんかはあまり流れのないとこの方がやりやすい。

**A:** あとちょっと思ったのが、掘割の少し浅いところの護岸の方に、掘割に出ていけるような川の水面に近くなるような場所を作って、子どもたちが放課後とかに遊びにいかけて、船を、子ども用の小さなボートなんかをつけて、気軽に掘割とかに入って遊んでいけるような場所や設備みたいなものがあったら、住民と子どもたちと掘割の近くと言いますか、近くなるのかなあとと思います。公園みたいな感じで掘割を使っていくみたいな。

**司会:** 公園はありますけど、なかなか掘割におりれるような公園はないですね。

**D:** 今、あるんですよ。水辺に面したところの公園というのは、整備しています。例えば、途中で出てきたと思うんですけども、整備をしました、新しく道路ができましたってところで、いくつか拠点的にな

る公園があったりするけど、実際先ほど言われたような活用がされているかという、そうではない。実際の使い方がわからなかったり、今ちょっと言われましたけど、危ないとかですね。子どもを1人で遊ばせたら、危ないんじゃないかなという声もやっぱりある。昔の親御さんたちが、危ないと思われたかがわからないんですけど。

**C:** 今日あなたが発表されたでしょう。私は矢留小学校の卒業生なんですけど、あれは今から約 70 年前なんです。思い出しました、小学校の 5 年生じゃなかったかなと。土橋の上、御花の、それから矢留小学校のプール、私は 80 歳何ですけど、小学校の 5 年生だったと思います。深かったですね。

**B:** 昔とかわつとらんところは、絶対農業用水がかわつとらんです。川下りのコースから、佃町に通っているユビ（井樋）、今度は下宮永に通るユビ、両開へ専用でいくユビ、上宮永に通るユビ、西宮永に通るユビ、沖端に通るユビ、と管理するにしっかりと決まっている。改修するにしても、ユビは変えられんように昔の堀も今の堀も変わらない。だからそこにはもう船とかはいかない。もう、田んぼの段差がいっぱいあるので。田んぼをするのに堰を作って、通し井樋と言うのが昔から決めてられている。そして、1 年中流れているけど、こっちの田んぼにちゃんと水が入るようになっている。また 200 メートルぐらい離れるとまた一旦下がって、



だいたい四尺真四角ぐらいのマスが段々にあって、田んぼの水を流れるように仕切っているわけ。最後は沖端川に流れるようになっている。今は雨が多いので、下のユビを、川につながるユビを今は開けとかなないと家がつかってしまう。それが今大変。家がつからないように、水路課が、どれぐらいの雨の予想という時は、水を落とすといいていいうので、落としてました。昔は田圃で持っていましたが、今は家がどこにも建っているの、家に入るのが一番いけないということです。

**D:** そういったところを子ども達にも伝えてもらってですね。親しみを感じてもらえたらですね。農業とか防災とか、長雨や大雨の際の先行排水など、注目されているところでもある。

**B:** その代わり、大雨が降っても川が引くと、水が引くようになっている。3時間待っていると、だいたい引く。6時間経つと全部引いている。それは大水の話をしているけど。

**司会:** 水路員が管理しているなど、その辺ももう少しクリアになって、管理の仕組みがわかると。

**E:** 水路員をされている方が市内に 1000 人超いらっしゃる。

**B:** 大雨でも水路を開けろとなるんで、その辺も考えてもらわなければいけない。夜中でも関係ない。潮が満ちているときは、水は引かない。

**司会:** 昔の方はみんな詳しいですね。

**B:** ずっと、どうなっているかは、頭の中に入っている。親父たちがずっとしているの。もう中学校になったら、見てこいと言われていた。昔は、雨の時堤防ば、泥のところに、降りていくのは怖かった。昔は整備されていなかったので、ツルツルで、晩にいく時は怖くて、竹もあるので、雨が降ってくると竹が出てくる。水か何かわからない。竹を握って降りて行ってた。堤防から。

**司会:** 管理まで、子供の時からしてたんですね、親の姿を見て。

**B:** 親が言うもんやけん。見てこいと。二丁井樋の水のこうなっているのがあろうが、それがジョウゴで高さを合わせていた。あれより高さが減らないようになっていた。マスが 15 センチぐらいで段々であって減らす時は一升とって調整をしてた。

**司会:** 活用とかのまとめをしたいんですが。

**D:** 柳川市って人口が減っているんです。この掘割、町割りと言うのは全国的に見て珍しいところで、残していきたいですね。定住につながられないかなと思ってますよね。

**I:** 石本君(司会)が住みたいと思ったのは、何がきっかけですか？

**司会:** 市民の人でも掘割は使えると言う話ですね。

**I:** 移住者とかに、堀はこんな感じで使えますよ、とかを伝えることができれば、魅力的

になる。

**B:** 結局はきれいな水にしないとでけん。油も流さない、洗剤も流さない、魚が戻ってくるような水にしないといけない。それが一番。水が澄みきると魚も戻ってくる。個人の意識で油とか洗剤を流さないで、田んぼを作って、土地はあるので田んぼに入れて染み込ませて、が一番いいと思う。

**I:** 子どもの時から、農業用水だったり、生活にも遊びにも使われていたのが、だんだんと水が汚くなって、泳ぐ人は減ってきて、農業は変わらず農業用水に使われていて、と言うのが今の現状。これからの堀を考える上で、活用していく上では、水をきれいにするのが一番大事。この班の具体的な案としては、水上売店をもう少しやり方考えて、川下り客から清掃税をとって資金をいただいたりとか、今できるサップなども発信していく。

**D:** 移住者の方が、なぜ堀を使わないのと言うのは、聞くんですよ、もったいないと、生活の中で全然見えないと。海外から移住された方がいるんですけど、堀割を使っていんじゃないの、と。



B グループ談義



B グループ発表

## C グループ            テーマ「防災」

C 班発表します。末次と申します。レジメに従って検討が進んだわけではなく、地域の方の今までの思いを込めた活発な話が洪水みたいに出て、非常に活気づいた場となりました。

災害、昔どんな災害とか、今の災害の特徴と問題点ですが、基本は大雨の洪水と火災、特に沖端地区等の密集地域、これを考えないといけない災害です。昔は堀の水位もあり堀で泳いで遊んでいた、生活に身近な堀だった。

今の問題点、水位が下がっている、場合によっては水位が下がっていることで堀の水を使った消火活動ができない。

そして大雨浸水については、沖端の方で例えば内水氾濫、毎年同じ場所が冠水する。対策としては、強制排水ポンプの増強と新設が必要だ。

なぜ水位が下がったのかというところが、皆さんの関心ごとだ。がそれがなかなか今答えは見えない。先ほどの講演にも日向神ダムの水位という話がありましたが、それも決定的なからくりというのはまだ見えていない。過去の開発によって、堀のかたちが変わって来ることによって水位に影響がでているのか、川底も変えられて水の流れが変わっているのかなという指摘もありました。

水位については観光で川下りをやって

いますので、川下りが円滑にできるように城堀の水位を一定に保つ必要があるため、樋門等を通して沖端の街中に十分な量の水が流入していないことが考えられる。昔は小学校のそばの堀をプール代わりに泳いでいたことを考えると、川下りの影響もあるのではないかな。

水位をあげていく、昔みたいにもっと水位を高くあげていくことがどうやったらできるのか、見えていないけど水位は大きな問題ではないかという話です。

基本は火事と大雨なんですけど、行政の役割と市民の役割につきましては、町全体の掘割がどういうからくりでどういう仕組みになって動いているかをもっと全体的に把握して、その中で水位も確認できたらよいのではないかな、行政としては広く見てからくりを見つけていってほしい、市民の役割としてはそれぞれの地域の事情を上にあげる、けどなかなか聞いてくれないということもありますが、市民と行政とのコミュニケーションを広く持っていくことが必要なのかなと思います。



※グループ C は談義の音声記録がないため発表内容を元にグループのリーダーがまとめました。



## D グループ      テーマ「浄化・生物」

**司会：**私が柳川に関わるようになったのは、広松伝さんと知り合ったのが昭和 63 年の 8 月ぐらい、その話をすると長くなりますけど、広松さんが水の会を立ち上げた時から私も誘っていただいて、関わるようになりまして、広松さんが亡くなった後、どうしようかと思ったのですが、広松さんの柳川の堀割に対する想いとか、そうしたものを立花会長と一緒に伝えていかないといけないだろうということで、関わっております。よろしくお願いします。この班は、D グループで、浄化水棲生物というお話になっています。昔、堀がどうだったか、魚がいたとかいなかったとか、今の問題点とか、いろんなことについてみなさん、おもいおもいに語ってください。昔はこうだった、今はこういうのがいけん、とか。それぞれいいですので、よかったら発言する前に、お名前を姓だけでも構いませんので、お話しいただければと思います。よろしくお願いします。

**A：**いいですか。柳川の沖端に住んでいるモリタと申します。私がまだ小学校時代は、水がキレイだった。朝のカミの水を汲まないといけんと言って、それこそ堀の水を汲みに行行って、今日言われたようにカメの中に入れて、餅をついたり、それとか堀干しが田舎であっていました。魚とかタニシとかがいっぱいとれて、両親が、魚を焼いて、串に刺して、俵を作って、俵のところに串をさして、

それをご飯を炊く竈門の上に置いていました。竈門の上の煙で、魚が薫製になっていました。それを朝、私たちが起きてくると、母がしょんしょんを作っていたもんですから、しょんしょんの中に小魚を入れて、食べさせてくれてました。そして、私たちがお嫁にいつて子どもを育てるときは、絶対子どものおむつは堀の中で洗ってはいかんと、堀はきれいにしとかんといけんから、別に桶をおいて、敷地の中に掘ってくれてました。掘ってくれて、その水は流してました。そしてだんだん私たちも、洗剤を使うようになりました。その頃は、洗濯板で石鹸でしたが。自分がお嫁に来て、子供がだんだん大きくなったら洗濯機があったから、その頃は洗剤を使ってたと思います。お堀に流れてたと。そして今はこの年齢になって、さっき瓢箪堀っていうのを九大の方が言われていましたが、私はそのそばに住んでいるんですよ。毎日上から木の葉っぱとかが流れてくるんですよ。うちの家の前に網が貼ってあるので、こうしてすくわないといけない。地域住民のために体を使って、堀をきれいにしています。

**司会：**わあ、素晴らしい。広松さんとか、映画があるでしょ。堀割物語。その通りのお話をされたみたいですね。使った水は、一回カメに入れて、土で浄化してから堀に流す。

**A：**そういう風に育ちました。16 年生まれの 80 歳です。

**B:** 私はこの辺からちょっと遠くに離れていて、昭代の方に住んでおります。そして、まだ柳川に来たのが 40 年前なんです。だからお堀の話は全くわからないですけども、私が初めて知ったのは、川下りはあるけれども、川が汚いなあと、そして東京の方から親戚が来ますから、そのときいつも川下りを一緒にしてるんですね。だけど、時期によって臭い時があるんです。だから、こうして若い方の力を借りてですね、これからもっと川をきれいにしていっていいかなあと思います。

**司会:** どちらから来られたんですか。

**B:** 東京からです。もう 40 年になりますけど。これから若い方達の力を。

**C:** 私は生まれてから今まで柳川市の沖端川沿いに住んでますけど、昭和 30 年代は国道橋、今は柳川橋っていうようなんですけども、そこで泳いでました。そして小学校 6 年生ぐらいになって三橋の水源地とかで、必ず夏休みは小学生が亡くなっていたので、昭和 36 年ぐらいに小中学校にプールができてきたもんで、だいたい泳ぐのは高畑やスイテンチ、で泳いでいたんですけど、昭和 45 年ぐらいに結婚して昭代に行ったら、姑さんが、まだ NEC ができる前にあの大きな川にくもを持っていたんですね。そして、それこそフナを釣って、森田さん言われたみたいに、干したり、一晩中クドで炊いてたり、一番びっくりしたのが、子どもがメダカば

1 匹か 1 袋 1,000 円ぐらいですかね、なんでそんなメダカば 1,000 円ですかって買ってくるとち聞いたら、川にメダカはおらんと、メダカとか川にどがしこでんおろうもんと思って、なんかびっくりしました、メダカが 1,000 円なんて。楽しい時代でしたよね、水着も着ないで、国道橋のところで泳ぎよったので、小学生時代、昭和 33 年ぐらい。アントクと言います。

**D:** 九州大学の学生です。もともとキレイだった掘割が、成長とともに汚くなって、もう 1 回キレイになってきていると思うんですけど、もともとキレイだったのに汚れてしまった、間っていうのは、ちょうど洗濯機が出てきた頃には、時代の流れでその頃はいと思っていたけど、そうなっちゃた。当時から「あー汚れちゃうな」って意識はあったんですかね。汚れちゃうなあと思いながら使っていたのか、洗濯機ができて便利だからって使っていたのか、あまり考えていなかったのか。

**A:** あまり考えていなかったね。水が汚れるとか。便利だし、仕事しないといけなかったから。便利、仕事。手で洗濯板でしたって、子どもの垢は残るもん。

**D:** やっぱり生まれた時からあるから、あんまり気にしなかったみたいな感じで。そしてそれからまた今、キレイにしていこうというはじまりは、やっぱり、さっきからお話しされている伝さんが一番最初にやって、

皆さんがついていく、そういう形ではじまったんですか。

**A:** それがね、そこをいわれると、その感覚をわからんけど、やっぱり自分が見て汚くなったと思うやん。いつも見る堀やろ。やっぱりキレイにしときたかもんね。藻草があったりすると、とりたくなるやん。私たちも70になると仕事がないやんね、子どもの世話もせんでよかし、仕事もないし、そういうことに力を入れないといかん。

**司会:** またそこね、話できる人が出てきますんで。

**E:** 蒲池にいます。伝さんの家に近所です。伝さんのお姉さんがご近所です。小さい頃から存じ上げております。先ほどからお話に出てて非常に懐かしいんですけど、堀干しというのがありまして、クリークを干して、たまった泥を田んぼにあげて、田んぼを高くして、かつ肥料分にする。村総出でやっていました。順番がありまして、田んぼについては、掘割にも、どこのっていう所有権が決まってまして、今年はどこ、次の年はどこ、せききって、バーチカルポンプであげて、大きな魚がとれたら、その日に大人たちが酒の肴にして、小さい魚はさっき言われていたように竹串に刺して、クドと言っていましたけど、竈門の上で燻製にして食べました。冬場になると、水が下がると、各堀ごとにセキがありまして、水の通り道があるんですよ。そこに「ロウゲ」という竹で

編んだカゴで、寒ブナをとって、冬の貴重なタンパク源で、鯉よりも脂が乗って美味しかった。そういう記憶があります。私が一番不思議に思うんですけど、柳川といえうなぎは有名なんですが、私は小さい頃、うなぎというのは、お金を出して食べるものだとは思っていなかったんです。自分で釣って食べるもんだという感覚があって、いつも家内と揉めるのですが、金出してまで食べるもんじゃない。それぐらいにうなぎがとれてました。冒頭会長がおっしゃったように、春休みの何が楽しみかといったら、夕方人よりも遅くハエばりをかけて、朝は人よりも早くあげる。梅雨の時期に川がにごるときには、お宮に行って小指ぐらいのミミズをとってきて、それを餌にして釣ってうなぎをとる。そういう風なことをやりましたし、他にもいろんな漁法がありました。ジュズと言いまして、ミミズを房のようにつないで、柳の下でバチャバチャさせてうなぎが食いついてきた。ハンギリと言って、たらいみたいな小舟に乗って、子どもがすることではありませんでしたけど、大人の方が延縄みたいにならずずっと引っ張って来ました。あと、どじょうなんですけども、私が最初に物心ついたときに、田植えするときは田んぼの水を落とすんですね。ためた水を落とすんですが、その落とした水口に、どじょうがガアーッと並んでいました。どじょうっていうのは、田んぼで産卵する、田



んぼの中をグルグル回って、その習性を利用して、板を立てて「ドジョウロウゲ」という竹で編んだものをつけておいて、その中に追い込む。あと、水の浄化の方法なんですけども、私には3人娘がおりますけども、長女の時まではやはりおしめを洗うときは、占いをする人に頼んで、今年はどこに穴を掘っていいかと決められていたんで、占ってもらってそこに穴を掘って、そこでおしめを洗って水を流して、そこで浄化する。次女三女の頃には紙オムツが主流になってくるので、そういうことはなくなりましたけども。あと不思議なのが、私が小さい頃はクリークには、「ベチャ」っていうタナゴ、佃煮とベンチョコとか、タナゴと言われること多いかと思うんですけど、光って綺麗な淡水魚などが、魚のいるところに寄ってきてたんですけど、それが今は無くなった。当時は確かに母が洗濯板やたらいでゴシゴシやってた。そのうち合成洗剤になって、そのまま堀に流す。便利になってきて、それでもまだ当時は魚はおりました。今はそういうことをやりませんし、洗剤も各家庭気をつかっています。直接水を落とすのではなくて、家の裏には「タンボ」と当時は呼んでいましたが、レンコンとか植えているところに、一回水を落として、それに余分なリンや窒素を吸収させて、それを水養分としていた。それも

今は見なくなりました。今はその代わり、新しく家を建てたときは、合併浄化槽をつけるということになって、それで生活排水というのは直接掘割に落とすというのは、私が小さい頃よりはきれいになってるはずなんです。ただ水路をいつも眺めみると、水の色も汚いし決してキレイではない。あれが不思議でならない。

**司会：**今も蒲池ですか？合併浄化槽は何年ごろにつけられたんですか。

**E：**今から30年前です。ちょうど水の会の会合に出たときに、合併浄化槽を扱っていらっしゃる方がいて、石井式だったかな、釘崎、前大和町にあったんですけど、今は会社が無くなっちゃったんです。石井式ではないです。ホシザキだったと思うんですけど、生活用水で水路を汚さないようにということで、生活をしておるつもりです。

**C：**質問よろしいですか。生活の下水道というのは、柳川は今下水道ができてるんですか。

**司会：**下水道が普及はしてきているみたいなんですが、どれくらいなのかは把握しておりません。その話はまた後にしましょう。

**F：**下水道はですね、今沖端の夜明茶屋あたりまでは、きておりますね。話によると。

**司会：**まだまだ柳川市民の1割ぐらい、もっていないかもしれないですね。まだ普及していないということで。次にいきましょうか。

**G:**九州大学の学生です。出身が福岡なので、柳川に来るのが今回初めてで、両親とか祖父母とかが福岡市出身なので、全く柳川市に縁もゆかりもないので、昔のこととか、わからないんですけれども。今の柳川を見たときの感想になりますが、掘割を見た時に思ったよりも汚い。僕の自宅の近くには室見川があるんですが、河口のところで潮干狩りができたりするくらいにはキレイなんですけど、そこと比較した時に、どうしても柳川の掘割の方が汚いです。本当に申し訳ないんですけれど。流れのあるところとないところ比較するのはどうかと思うんですけれども。川下りやなんかであの水の姿を見てしまうと、ちょっとげんなりするのかなと思います。あとは、外部の人間としては、柳川というと最初に川下りという印象があって、いわゆる掘割を管理する発想とか、あまり外部の人間には馴染みがない。それを観光として見に来る人はあまりいないのではないかと思います。だから、そうしたところをもう少し前に出していったら、柳川の人が掘割に関わっているんだよとしめしていけるんじゃないかなと思いました。あと、太い道の隣に掘割とかがあって、掘割側に歩道があって、家とかは道路を挟んだ向かい側にある掘割・道路・家という感じなんですよけれども、例えば坂の町の、城の周りも掘割とか近い感じで、あんまりその掘割と人が密接に関わっているという形が少し薄

い感じがします。そういうところ少し変えていった方がいいんじゃないかと思いました。

**A:** 同感です。その通りです。汚いです。

**司会:** 外部からの貴重なご意見でした。

**H:** 私は柳川市沖端に住んでおります。沖端、城内、柳河の3つの地区がでましたんですけども、2年ほど前に広松さんから電話をもらって、こういう方がいるから掘割のことについていろいろ聞かせてくれませんか、5、6人集めてもらえませんか、という依頼がありましたので、何人かの区長と集まって会を設けました。沖端というところは、私は、川がある南の方です。有明海に近い、矢留小学校の西側になります。沖端川の方が近いです。ここは北の方でございますので、今日の九大の発表は、よくわかりました。私が小さい頃は、今と同じようにまず、私の裏に2メートルぐらいの川が流れていました。そこで泳いでいました。魚をとるために、私は、家の裏に井戸がありました、井戸の水をポンプであげて流して、友達が「きたぞ、きたぞ」と言って、すぐメダカが寄ってきておりました。魚が冷たい水を求めて寄ってきて、それをいろいろちょっととったりして、観察したり、遊んでおりました。そしてそこで合わせて泳ぎ始めの練習をしておりました。2メートルあるなしの川ですから、トンっといけばもうすぐ向こうに行けてました。そしてある程度泳げるようになってから、

今ありました矢留小学校の前の堀、大神宮の  
ところの堀で飛び込んだりなんかして、  
小学校の時には、私は昭和 15 年生まれです。  
もう 81 歳になります。そういう昔の思い出  
を語ったり、思い出しながらこの会に参加  
しています。とにかく、そうした堀が、もう  
最近が変わってきたんですけど、夏には臭  
くて臭くて、お客さんがきたら、裏の南町通  
りに富貴という鰻屋さんがありました。鰻  
屋さんのうなぎの匂いで、臭い匂いも取り  
消される。若い頃そういう体験をしており  
ました。何とかならないかな。もうずいぶん、  
土が浅くなりましたね。で、流れません、あ  
の辺りは。

**F:** 流れると砂地になってましたもんね。昔  
は。

**司会:** 今は有機分が分解し切らなくて、ヘド  
ロになっている。

**H:** 2 月ごろの堀干しの時に、ある市会議員  
さんがきてくれましてね、どぶさらいしま  
すけれども、もう漁師がいなくなって、長靴  
では入れないんですよ。だから、ダバを着て  
とってきて、それからずいぶん変わって  
きたんですけども、あれはまたすぐ帰っ  
てくるんですね。そういう努力をしていか  
ないと、ずっと積み重なっていく間に、かな  
りキレイになっていきました。私は思うん  
ですけども、夏に 1 週間おきとか 2 週間お  
きに水を上の方から流していただくと、そ  
の水でキレイになる。

**司会:** 石本さんが出してくれた映像。矢留小  
学校の前の水路って今 2 メートルぐらしか  
ないでしょ。

**H:** 一番広いところで、4、5 メートルある  
んじゃないですか。私は忘れませんが、3  
年生の時に掃除をしていて、水草をこのほ  
うきでとってみると言ってから、水汲み場  
に出て、松葉ぼうきでとっていましたです  
よ。ある時、ストンと落ちてしまって、急い  
で家に向かって着替えに行ったんですよ。  
とにかく流れていたものが、なんかこう、か  
と言って、ゴミを捨てたりする人は今はも  
ういないんです。私が退職後に勤めていた  
ところに神野さんという市議会議員さんが  
おられて、今もお話のように、山川海の研  
究会というものを開いてありました。山に降  
った雨が、川から海という発想ですね。では  
そういうことをされているかということ、ジ  
ャガイモを作ろうと、近くでジャガイモを  
作られて、みんなで作られて、それをジャガ  
イモ植えて収穫をして、必ず食べたりお茶  
を飲む催し物をされていて、私もちょっと  
参加したんですけども、なんかそんなふ  
うにして、集まって話題にして、生活その  
ものを変えていこうというものだったろうと  
思うんですけど、いい勉強だなあと思った  
ところでした。以上です。

**I:** 皆さんこんにちは。私は生まれ育ちは三  
橋磯島でございます。ユエと申します。すご  
く珍しくて、全国 20 件あるかないかの名字



です。インターネットでユエカズヒロで検索するとすぐ出てきます。それだけユエというのは少のうございますけれども。生まれ育ちは磯島なんですけども、今、オオブチさんのお話をきいてですね、小学校の頃を思い出しました。三日三晩、夜を徹して水を汲み上げて堀干しをしておりました。集落全部で、関わっていました。堀は行政の堀なんですけれども、昔ながら先代からずっと堀を守ってきた。そこで守りながらも魚をたくさんとれるような堀に、みんながやっていた。その堀で、きいた話ですけども、柳川はどんな干ばつがあっても、栄養失調などで亡くなった方が藩政時代に1人もいないという、柳川藩という有名なところがございます。それだけ魚もいて、食べるものがあるということで、この地域は恵まれていた、ときいております。そこで私なりに思うのは、水から与えられてものは山ほどあるんじゃないかなと思っております。

**司会：**皆さんいいお話を聞かせていただいて、私も島育ちで、百姓の息子で、小さい時から堀干しを8月ぐらいに必ずやっていました。魚をとって、干していた。野菜とか米とか魚もとっていたので、自給自足に近かった。肉が食べて見たいと思ったけど、全然美味しくなかった。親父が正しい食生活やっていた。病気したことがなかったです。93歳

まで生きたです。それと今おっしゃった堀干ししとるけん、深く掘っている、ヘドロをとっている。

**I：**だから魚が集まるんですよ。川底をさらえると魚がきます。

**司会：**カマ\*が作ってある。雨を貯めとくですたい。大詫間は島やけん、ものすごく干ばつしてきた。干ばつの時はその水をあげる。そうするとまた翌日には貯まっている。ずっと循環してた。今思い出しました。

**I：**蒲池は循環式で、沖端は流れ通しで水を止めない、ずっと流れている。ところが川北、磯島とか蒲池は循環式で使った水を繰り返し使う感じです。

**司会：**すたまってくる。一晚経つとまたわいてくる。

**A：**私は汚い印象しかありません。

**マツフジ：**汚いのが色が汚いのか、澄んでるのがいいのか、となるとなかなか難しいところがあるのかなと思います。私も蒲池なんですけども、やはり溜まり水なんで、色からすると透明ではない。ただ栄養分はあるんじゃないでしょうか。だから、田んぼにあってその循環やったです。私は、堀干しは2回ぐらいしかしたことないですけど、その土地ごとの水利用の仕方が違うのかなと。あとは、昭代あたりも蒲池と同じようです。

**C：**昭代も汚いですよ。私昭代に住んでますけど。

※カマ：堀の深いところで、柳などで作る魚が集まりやすい棲みか

**J:** すきとっている水をキレイというのか、水質という点から見たらどうなのか。

**A:** 泥みたいなものが、だんだん積もってきて、水は少なくなってきたんです。

**J:** 前はそれをあげよったんですけどね。

**司会:** とは言っても、福岡から来られた九大生の方は、柳川の掘割の水は透き通っていない。昔はこれを飲み水にしていた。それはキレイかった。それが汚れた原因というのが、いろいろあるんでしょうけど、微生物を殺す合成洗剤が流行って、人間が使った物質が一番悪いんです。

**C:** 結局人間がしているんですよ。

**司会:** 掘割の水を飲んどったというのを聞いて、私はびっくりしましたけど。そういう時代があったんです。水道が流行る前、掘割の水を飲んでいた。

**C:** 階段がありますよね、汲水（クミズ）。

**司会:** すいません、非常に熱く語っていただいて、これだけでも本来の目的を達した感じですけども、これをまとめるのは、どうしたら。

**I:** 私が言いたいのは、キレイな水の掘という話がありますが、柳川の掘割だけの掘は、日本でただ1箇所。てへんの「掘」は柳川だけです。なぜか、2000年かけて掘ったけんです。

**司会:** それとですよ。説明でですね、私ちょっと違うかなと思ったんですけど、田んぼのために掘割を掘ったところもあるんで

しょうけど、そのままだと住めなかったんですよ。潟だったんで、だから堀を掘って高くして家を建てたんです。そうしないと住めない。潟をみればわかる。柳川は堀を掘らないと生活ができなかったんです。

**I:** それと先人がすごいのはですね、1キロで30センチの傾斜をつけて道を作っています。ローマの水道と同じ。水道は水が腐らない。掘割という言葉は、大正になって北原白秋がつけた名前。「思ひ出」に出てくる。



**D グループ談義**

## 講評

**会長：**貴重なご意見をたくさんいただきまして、レポートをちゃんとまとめるように、事務局よろしく願いいたします。

菊地先生にお聞きする前に、私が感じたことですが、(Aグループについては)やはり堀の水が汚れて、水と接する機会が現在のはものすごく少なくなった。ですから昔は柳川の観光というのは、生活文化を見るということでした。どんな暮らしや生活をしているというのが、観光の衆目するところだったんですけれども、その水文化、生活文化がものすごく劣化して見えなくなっているというのが、印象にあります。自然と観光客のための掘割みたいな話にもなってきました。

Bグループでは、水さえ美しくなればなんでも活用できるよというのが結論かなという気がします。

それからCグループの防災の方では、ほんとに生活文化というのが劣化してくると、あとは防災しかこの掘割には残っていないじゃないと。水害の時にどうする、火事の時にどうするのという活用しかないというか、昔は飲んでたの魚釣ってたのというよりは、直接的な災害のための掘割というのが印象に残ります。それから、水位の低下、有明海の干満の差が6メートルある中でそのレベルは変えられないんですよ。変えられないはずの中に、水位が低下しているのは実

は大問題なんです。大問題だけど、そこが割と皆なあなあで暮らしているというように気がしますので、この水位の問題というのは、これからも水の会も注目していきたいと思っております。

それから浄化のDグループでは、昔は当たり前に飲み水が柳川の掘割に流れていて、よく言われていたんですけど「生水は飲みなよ」と。生水がなんなのかよくわからなかったです。生水と生水じゃないもの。要するに、沸かしさえすれば飲めるというのが、堀の水だったんです。沸かすから生水じゃなくなる。今の水を沸かして飲めるかというと、勇気ある人いますか。水質の状況とか、下水道の普及率とか、問題もあります。下水道が1センチもなかった頃、ちゃんと飲めています。そういう柳川の歴史がなぜ変わったのか、どうすれば回復できるのか、というのが大きなテーマです。市民と行政がコミュニケーションを取ろうというようなことが、報告を聞いてて印象に残りました。どうもありがとうございます。

### ① 菊地成朋 氏（九州大学名誉教授）

とても面白く聴いていたので、うまくまとめられるかわかりませんが、まずはグループワーク、ワークショップを今回企画されて、なかなかこういうのはうまくいかないんですよ。町づくりでこういうワークショップってよくやるんですけども、



それぞれそれなりにやっているけれども出てくる内容があまり豊かでないとか、展開してないことをよく見かけるんですけど、今日のワークショップは、とても実りあったような気が私はします。

まず中身があるということです。それが動いていっている感じがしました。これは一つには、もしかしたらメンバーが良かったのかもしれない。地元の人もいて、外からこられた人もいて、若い学生もいて、ずっと地元で暮らしてこられた方もいて、その人たちが話をするというのが、触発されるものがあったかと思いますし、何より柳川という素材が面白い。これは外からの目になってしまいますけれども、やはり考えるべきテーマはいっぱいあるということですね。

それから、設定も良かったと思います。過去をちゃんと評価して、現在の課題を見て、未来を展望しようという、過去・現在・未来的な設定を、よく皆さんにそれに対応されていたなと思います。

聴いていて、私の方からアドバイスすると。最初のグループ（Aグループ）は景観だったと思いますが、例えば、元々は景観というものが何か、やっぱり柳川の場合には議論の余地があって、私が最初にお話ししましたように、柳川が文化的景観という文化庁の取組をするときに関わったんですけども、文化的景観という時の景観と一般的にいう景観とはちょっと違う。景観とい

う言葉を聞くと、たぶん見た目というふうに捉えられると思うんですけど、きれいな風景が景観だと捉えられると思うんですけども。文化的景観というのはもともと、世界遺産から世界遺産カルチュラルランドスケールという概念から来ているんですけども。文化的景観というのを今スマホで確認したのですが、「地域における人々の生活または生業、及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」、だから見た目ではなくて、意味を評価しようということなんですね。その景観が、その景観を生み出している人々の生活であるとか、あるいは人々の生業いうものを、理解するための素材として景観を見ようということなんで、つまり景観というものは作るものではなくて、営みの結果だということなんですね、だから、とても柳川は、そういう取組にマッチしていて、最初国がパイロット事業として図らずも柳川を選んだというのは着眼だったと思うんですけども、すいません私の努力も足りなくて、まだ文化的景観の選定を受けてないんですけども、取組としては非常にあってるんだなあと思うんですけど。

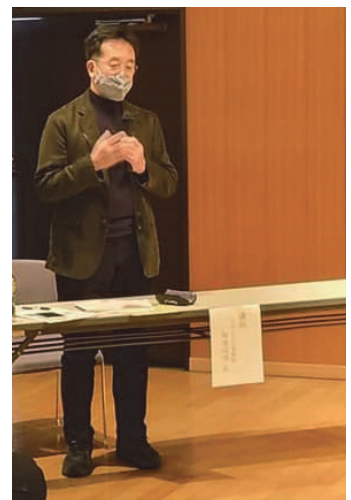
もう一つ景観とともに議論されるが観光だと思うんですけど、観光というのもですね、従来の観光とこれからの観光というのは、違ってくる、もうすでに違ってきている

と思うんですけれども、名所に行ってただ帰るという観光から、様々な訪れる場所との関わりというのを発生させているのが、これからの観光だと思うんですね。滞在型とか体験型とかいいですけども、関わり方が多様になっているんで、まだ観光というと大型バスで来てみて帰るというのと、今はそういうことではなくて、そこでの暮らしに参加する、外から来た人も参加して関わって、理解をして、その地域や人々に敬意をはらうということが観光のモデルになってきている。こういうのが、エコツーリズムとかという言い方をします。以前はグリーンツーリズムという言い方もあったんですが、今はそうした生きた環境を楽しむとか、生きた環境に参加することで、人が充実するように変わってきている、非常に個別的になってきている、ツーリズムというのは、そういう意味では、柳川においても今いろんな、何かもともと昔あった生活が、生活の経緯が見えるような風景というのがなくなってきているんだけど、今営みとしてあるのは、取組があると思います。水の会の取組というのは、まさに営みであって、人々が問題に取り組んでいるという姿が、まさに営みであり生業であり生活であり、それにむしろ人々をそこに対しての人々に敬意をはらわせるというようなこともあり得るかもしれないし、そういうことがわかることが場合によっては、石本君のように

非常に地域に対する共感を生むことにつながるかもしれない。

未来の柳川と多少の人の関わり方というのは、これから柳川が良くなるというのに対して、いろんな人が参加しているという感覚がですね。そういうのがいいのではないかな。楽観的すぎるかもしれませんが、いずれにしろ問題はすごく難しい問題が山積していると思います。

水と言うのは、扱いにくいし、皆さん苦労されていると思うんですが、できるだけ、ポジティブにやや楽観的と言うと言い過ぎかもしれませんが、ポジティブな発信をしていくと言うのは、非常に大事。そういうある種の活動を様々なポテンシャルを地域の魅力に変えていくと言うふうにすると、オリジナルにできる場所じゃないかなと思います、柳川というところは。私も関わりが時々になっているので、今後も柳川とも関わっていきたいと思います。お役に立てることにしましては、お役に立ちたいと思っています。ほんとに今後の柳川を楽しみにしております。



## ② 松永久氏（柳川市水路課長）

今日話を聞いてて、私はどちらかという  
と、掘割が一番汚い時期というか、新聞等々  
で「ぶ〜ん蚊都市」という時ぐらいが、一番  
知っている柳川の印象だったですね。そ  
れから私の大学生の頃に広松さんの映画が  
出て、柳川にこんな人がおるのかと。同じ蒲  
池の出身ということで私が近寄った時に、  
初めて顔を見たという感じでした。柳川の  
今の水路課に4年ぐらい居らせてもらって  
いるんですけれども、やはり皆さんたちが  
こういった形でいろんなことを考えてで  
すね、堀のことを思ってくれているという  
のが、一番嬉しいかなと思います。やはり行  
政だけではどうにもできないところがある  
んで、やはり地域の皆さんの協力が必ず必  
要になってくるんですね。こういう風な、い  
ろんな形で、地元、城内、城堀だけじゃなく  
てですね、自分の近くの堀とかを見ながら  
ですね、またあらためて堀のことを見て考  
えていただければ、幸いだなぁと思ってい  
るところです。以上です。



## ③ 佐々木秋雄氏（柳川みやま土木組合事務局長）

私は最初にご紹介いただきました柳川み  
やまの土木組合の佐々木と申します。私は  
柳川の掘割の水に関しては、数十年携わっ  
てきておるわけでございます。私がこの職  
業に就く前のことをちょっと話しますと、  
以前は水が大変多かったと、柳川市内で  
も、お堀の中でも、小さい頃いっぱい泳い  
で、水遊びをしていたとか、二ッ川とかで  
も40、50年ぐらい前までは泳がせていた  
だいておりまして、ほんと水も綺麗で、泳  
いだということは、7月とか8月とか小学  
校低学年の頃の夏休みじゃなかったかなあ  
と記憶しておりますが、その時はほんとに  
二ッ川は綺麗で今現在の状況とはだいぶ  
違うような気がするところです。八女市黒  
木町の方へも仕事で登っていきますので、  
その水に関わっている人たちとお話をしま  
して、やはり上流域、星野川とか、いろん  
な矢部川の方に、中小河川と言いましょ  
うか、そういったところの方にもお話を聞  
きますと、やはり二十年前ぐらいから、か  
なり水量が減っていると聞きます。それが  
水の会の平野さんのお話でもありましたが、  
具体的に何かと言われましても、何がこ  
うなって減りましたよということは今の段  
階では、話せるような状況ではないという  
ことです。それとやはり、矢部川の方も昔  
から比べれば、水質がかなり悪くなったよ  
うであると、それから水温が以前と比べる



と、日向神ダムが昭和 35 年に完成し、37 年から運用されております。ダムができて以降は、矢部川の水温が高くなったような話もちらほら聞くような状況です。実際にそれがどうなったとか厳格には数字に出せと言われても数字に出せるような状況ではないということでございます。今後水の会が発展し、みなさん方がこれだけ掘割に対して関心をもっていただいたということは、今後堀に関しては、観光もありますし、また農業漁業としても一番大切なクリークでございますので、今後皆さん方に関心をもっていただいて、よりよいお堀づくりにしていただければと思っております。



#### ④横山正司氏（柳川郷土研究会理事）

私は生まれも育ちも沖端でございます。80 年生かさせていただきました。それで今日ですね非常に印象に残ったことは、我が母校矢留小学校横の堀で、北原白秋先生の母校でもあります、そこで泳いでいたん

です。ちょうどあそこは 50 メートルあります、あの写真は 70 年前ごろ小学校 4 年生か 5 年生ごろの写真だろうと思います。それから御花の西側、いわゆる土橋ですね、隣は沖端郵便局がありました。その写真もありました。ちょうど沖端の水天宮さん、お祭りですね、行ったり来たりするところですね、あの川で泳いでおりました。非常に懐かしく印象深くて、涙が出ました。ありがとうございました。

では本題でございますけれども、一番沖端で困っていることは、防災でございます。私も行政区長をさせてもらっていますけれども、北原白秋生家が火事になったでしょ、明治 23 年、あれがちょうど 1 月でした、北風が吹いて飛び火して、沖端の大火と申すわけでございます。で、白秋生家が全焼したので東京にいかれました。大火の時、干潮のためちょうど水がなかったんです。それで大火になったわけですね。ちょうどうちの祖父がこの時は、沖端の 3 分団の団長をしたと聞いております。

昨年皆さん見られたと思いますけれども、NHK 全国放送の新日本風土記で、ひょうたん堀も出ていましたけれども、戸島邸からこう流れていきます。ひょうたん堀にたまります。それから沖端川から有明海に流れるわけでございます。そのひょうたん堀を私たち行政区住民が約 45 名、「掃除ばしてくれんかんも」「よかばんも」と引き受

けたのが、ひょうたん堀の清掃でございます。番組の最後に放送されました。放映が10月30日だったかな、2回もありました。

私たち沖端住民は、一番困っているのは水問題。水とゴミ問題です。城内から流れてくるのが沖端でございます。そういうことです、住民の方は一つお願いでございます。ゴミを絶対に捨てないでください。昨日一昨日も矢留小学校の4年生を川上りに連れて行きました。沖端水天宮から三柱神社まで、ずっと私も子どもたちにお話をしましたけれども、一番困っているのは防火でございます。火事でございます。それから水害もあります。私共が住んでいる所は昔沖端川だったので、100%浸かります。そこに数軒ございますけれども、だから今度の沖端行政区長会議でポンプの設置と、いわゆる調整排水ですね、今、松永部長が一生懸命努力されまして、先行排水、だから柳川は大水がないわけでございます。久留米市大牟田市は大水でしょ、柳川市だけはないでしょ、それが先行排水。非常に水路課長が頑張ってもらっております。水路委員長もいらっしゃいますけれども、一番防災に困っているのが沖端でございます。ゴミと防災。話は長くなりましたけれども、住民の方、また行政の方、ご協力よろしく願いいたします。水の会、ますます発展していただきますように、我々も協力いたしますので、これからもよろしく願いいたします。



## 柳川市市民協働のまちづくり事業

---

発行日 令和5年 1月  
発行者 水の会  
柳川市下宮永町880-1  
お問合せ先／TEL090-4487-1963(平野)

印刷所 (株)プリンティングコガ  
大川市大字一木736-5 TEL0944-88-0027